

清末探偵小説史稿 (二)

—— 翻訳を中心として ——

中 村 忠 行

(二) その他の英・米作家と作品

(1) アーサー・モリスン

ドイルほどの人気は集めなかつたが、比較的早くから紹介され、かなりの反響があつた作家に、アーサー・モリスン(Arthur Morrison. 1853-1945)がある。彼の作品は、ドイルに較べると地味で、才気煥発といつたところがなく、又フリーマン(Richard Austin Freeman. 1862-1943)の作品の様な科学性にも欠けてゐる。それが災ひしてか、我が国では余り歓迎されてゐない。作品の紹介の如きも、大正十一(1922)年八月の『新青年』増刊号に掲げられた延原謙訳の『十一の瓶』(後、改題『緑のダイヤ』、原作は“Green Eye of Goona.” 1904)あたりが最初のものであるらしく、次いで同誌大正十三年七月の増刊号に、田中早苗訳『ヒュイット探偵』(原作は“The Case of Laker, Absconded.” 1895)、昭和四年(1929)十二月刊延原謙訳『モリスン集』(博文館版『世界探偵小説全集』第八巻。上記『緑のダイヤ』及び『海底の探偵』“The Nicober Bullion Case.” 1895を収む)、『新青年』昭和七年(1932)八月の増刊号に記載された妹尾韶夫訳『稀代の美術品』(“The Stanway Cameo Mystery.” 1894)などが続くが、極めて散発的であり、読者の反響もさして大きなものではなかつた。されば、江戸川乱歩氏の『海外探偵小説・作家と作品』の如きも、彼の名を削つてゐる位である。しかし、ドイルに次いで、シリーズものを書いて成功した作家として、モリスンの名は逸することは出来ないし、「シャーロック・

ホームズに続く幾多の亜流の中で、一頭抜ん出たもの」(S. S. Van Dine.)として、探偵ヒューイットの名を忘れることは出来ない。その意味で、モリスンの作品をいち早く紹介した清末翻訳文学界の指向したところは、決して誤つてはみながつたと言へる。

そもそも、モリスンが探偵小説に筆を染めるに至つたのは、全く偶然からであつた。これより前、『ストランド誌』にホームズものを書き続けてゐたドイルが漸く仕事に倦み、これを打切るべく、「最後の事件」(1893年12月)でホームズをライヘンバッハの滝壺で行方不明にしてしまつた。突然の打切りに、不満を訴へる読者の声は予想以上に大きく、困惑した編輯者は、急遽その代役として、モリスンその他二三の作家に白羽の矢を立てたのであつた。これが、やがて輩出する無数の名探偵——「シャーロック・ホームズの敵対者たち^{ライバル}」を産むそもその切懸である。

当時、モリスンは、未だロンドンは East End に取材したエッセイ風な物語集『みずぼらしき通り』(“*Tales of Mean Street.*” 1894)を纏めつつあつた時代であるが、はやくもその才能をウィリアム・ヘンリー (William Ernest Henley. 1849-1903) に認められ、所謂「ヘンリー・グループ」の一員として、漸く文壇に羽撃かうとしてゐた矢先のことである。序でを以て言へば、ウィリアム・ヘンリーは、詩人・劇作家・批評家として知られ、当時は『ナショナル・オブザーバー』(“*The National Observer.*”)紙の主筆として、謂はば文壇の大御所的な存在であつた。従つて、その周辺に集つた人々は、サー・ジェイムズ・バーリー (Sir. James Matthew Barrie. 1860-1937)、ラドヤード・キップリング (Rudyard Kipling. 1865-1936)、ロバート・ルイス・スティヴンソン (Robert Louis Stevenson. 1850-1894)、トマス・ハーディ (Thomas Hardy. 1840-1928) など、何れも当代一流の文壇人ばかりであつた。されば、モリスンが、そのグループの一員として迎へられたことは、既に文壇への道が開かれたと言つても差支へない。今一つ、ロンドンの East End と言へば、今日では貧民窟の代名詞の様に受取られ勝ちであるが、モリスンが育つた当時は、1860年代の区劃整理の後だけに「最もよく整備された労働者の住宅街」と言つた印象の方が強く、喧嘩や刃傷こそ絶えないまでも、下町特有の人情濃やかな庶民

の街であつた。上記の『みすぼらしき通り』はじめ、『ジェーゴの子』(“*A Child of the Jago.*” 1896) など一連の作品は、かうした下町に住む人々の生活を生々と描いた作品で、ユーモアとペーソスに満ち、何処となくディケンズ (Charles Dickens. 1812-70) を想はせるものとして、歓迎されたのである。されば、探偵小説の執筆といつたことは、モリスンとしては必ずしも本意とするところではなく、後年その作品の再版を肯んじなかつたといふことも、その辺に理由があるかと考へられる。¹⁾

それはともかく、かくて執筆されたその第一作「レントン^{クワット}屋敷盗難事件」(“*The Lenton Croft Robberies.*”) は、ホームズものの場合と同様に、シドニイ・パジェット (Sidney Paget) の挿絵を添へて、『ストランド誌』1894年3月号を飾る。ヴァン・ダイン (Van Dine), ヒッチコック (Hitchcock), クイーン (Ellery Queen), 江戸川乱歩氏などは、何れもモリスンの代表的作品として、これを挙げる²⁾ が、如何にもそれに値する気の利いた作品で、鸚鵡にマッチ棒を銜へさせるといふ趣向も面白い。これを機に、モリスンは、同年九月まで、七篇の短篇を『ストランド誌』に書き続けるが、それを結集したのが、第一短篇小説集『探偵マーティン・ヒューイット』(“*Martin Hewitt, Investigator.*” 1894) である。

翌1895年の一月から、モリスンは執筆の舞台を専ら『ウィンザー誌』(*The Windsor Magazine.*) の方に移し、引き続き探偵ヒューイットを主人公とする小説を書いた。第二短篇集『マーティン・ヒューイットの事件簿』(“*Chronicles of Martin Hewitt.—Being the Second Series of Martin Hewitt, Investigator.*” 1895), 及び第三短篇集『マーティン・ヒューイットの冒険』(“*Adventures of Martin Hewitt.—Third Series.*” 1896) に収める各六篇の短篇は、凡て同誌に掲げられたものである。契約によつて、それらは1895年と1896年の一月から六月までの号に連載された。一年の前半は探偵小説を書き、後半は他

1) P. J. Keating: Arthur Morrison. (In “*A child of the Jago.*”, Ed. with a biographical study by P. J. Keating., London MacGibbon & Kee. 1969 ect.)

2) Van Dine ed.: “*The World's Great Detective Stories.*” (1927); Hitchcock ed.: “*The Pocket Book of Great Detectives.*” (1941); E. Queen ed.: “*101 years' Entertainment.*” 等々の傑作集に収める。

の仕事に力を傾注するといふのも、モリスらしい遣り方であつた。その後、モリスは、暫らくヒューイト物の筆を絶つが、1903年に至つて再び筆を起した。『赤い三角形』(“*The Red Triangle, Being some further Chronicles of Martin Hewitt Investigator.*” 1903) に収める六篇がそれで、『ロンドン誌』(*London Magazine*) に掲げられた。インドからロンドンに来襲した催眠術使ひの怪盗を相手に戦ひを挑むヒューイトのこの物語は、明らかにアメリカに於けるニック・カーター物の流行の影響を受けた作品で、それだけに探偵小説的な要素は薄く、又個々独立した作品ではなく、所謂「続き物」乃至は「捕物帖」の形をとつてゐるのが、特徴である。

とまれ、如上の経緯から執筆されたモリスの探偵小説が、当初からドイルのそれを意識してゐることは、更に多言を必要としまい。探偵ヒューイトはホームズの、新聞記者ブレットはワトソンの、それぞれの変形であるし、犯行現場の遺留品の正確緻密な観察による謎解きや、事件関係者のアリバイの確認によつて容疑者を絞つて行くヒューイトの捜査法などは、全くホームズのそれに異ならない。ヒューイトの特技といへば、労働者や悪党たちのスラング・ジブシーたちの用語に通じてゐること位で、探偵としては、むしろ小粒でさへある。その辺に作者の限界があるのは確かだが、小粒なのは、決して模倣なるが故ではない。作者は、ヒューイトをして、「普通の能力の適当な活用以上に、特別な捜査のシステムを有たない」と語らしめてゐるが、彼はホームズのように、居心地のよい書齋を有つた天才的な探偵でもなければ、ソーンダイクのように、立派な研究室を有つ法医学の権威でもない。彼は、ストランド街に近い横町に貧弱な事務所を構へてゐる平凡な市井の探偵に過ぎないので、要するに、「風貌も態度もホームズ流の超人的探偵への反動」(Julian Symons: “*Bloody Murder.*”) として、登場するのである。その意味で、モリスは、「足の探偵」バケット警部を描いたディケンズや、カフ巡査部長を案出したコリンズ(William Willkie Collins. 1824-1889)の流れを汲み、ジョセフ・フレンチ警部の産みの親クロッフ(Freeman Wills Crofts. 1879-1957)の先輩作家としての役割りを果してゐると言へる。

モリスは、これらの活動によつて、王立文学協会の評議員に選ばれたが、

今一つ忘れてならないのは、東洋美術——就中、日本と中国との絵画の蒐集家として、著名な存在であつたことだ。その労作『日本の画家たち』（“*The Painters of Japan.*” 2 Vols. 1911）は、浮世絵研究の古典的名著として高い評価を受け、確か邦訳もあつた筈である。晩年、彼はバッキンガムシャー州の田舎に隠棲し、これらの美術品に親しみつつ余生を送つた。その蒐集品は、一部が1914年エバンス卿（Sir. Watkin Gynne Evans.）によつて買取られ、大英博物館に寄贈され、残りの蒐集品も1956年来数次にわたつて、未亡人から同館に寄贈された。

さて、華訳されたモリスンの探偵小説の主要なものは、

| (華 訳 名) | (原 著 者) | (訳 者) | (発 行 所) | (刊 年) |
|------------|----------------|--------------|---------|-------------------|
| 馬丁休脱偵探案 | 英・馬利孫 | 奚 若 | 小説林社 | 光緒三十一年 (1905) |
| 偵探小説 神樞鬼藏録 | 英・阿 瑟 毛 利 森 | 林 琴 南 魏 易 | 商務印書館 | 同三十三年五月 (1907) |
| 海衛偵探案 | 英・模利孫 | 商務・編訳所 | 同上 | 同三十四年四月 (1908) |

（阿英氏の『書目』には、著者を「毛銳孫」とする。さうした本もあるか。）

の三点である。これらのうち、『馬丁休脱偵探案』は未見に属するが、阿英氏の『書目』には、次の十篇を挙げてゐる。蓋し、後に引く『小説管窺録』の



「神樞鬼藏録」の項に、「燒手案」（阿英氏の『書目』では第六案）を第七案として以下第十一案まで数へ、又『海衛偵探案』にのみ見える五篇を指すのであらうか、「尚有五案」と記してゐるところから推すと、奚若の訳に係るものが尚一篇あり、第二冊の第二話と第三話との間に置かれてゐたに相違ない。今、その作品名を詳らかにし得ないのは残念である³⁾が、爾余のものについて、原作を推考すれば、次の如くである。

3) 阿英氏の書目『醒華小説集』の項に、「鸚鵡案 英・馬利孫著 奚若訳」を録するが、これは「克落夫脱邸第失竊案」を改題したものであらう。

| (華 訳 名) | (原 作 品 名) | (所収作品集略号 作 品 番 号) |
|-------------------|-------------------------------------|----------------------|
| 第一冊 | | |
| 克落夫脱邸第失竊案 | The Lenton Croft Robberies. | I-No. 1 |
| 鎗斃福拉脱命案 | The Case of the Flitterbat Lancers. | III-No. 1 |
| 黑人被殺失屍案 | The Affair of the Tortoise. | I-No. 7 |
| 第二冊 | | |
| 查失魚雷艇凶案 | The Case of the Dixon Torpedo. | I-No. 4 |
| (其?) 以維考旦其之秘密案 | The Ivy Cottage Mystery. | II-No. 1 |
| 〔逸作品名歟?〕 | | |
| 燒 手 案 | The Case of the Missing Hand. | II-No. 4 |
| 第三冊 | | |
| 瘋 人 奇 案 | The Case of the Lost Foreigner. | II-No. 6 |
| 銀 箱 案 | The Nicobar Bullion Case. | II-No. 2 |
| 銀 行 失 竊 案 | The Case of Laker, Absconded. | II-No. 5 |
| (哈爾富特) 遺囑案 | The Holford Will Case. | II-No. 3 |

‘Ivy Cottage’を「以維考旦其」と音訳するのは許されるとしても、‘Lenton Croft’を「克落夫脱邸第」とするのは如何であらう。‘Croft’を人名(姓)と考へてみたとすれば、それは自ら翻訳の質の問題ともならう。上述の如く、奚若には他に色々な訳業もあつて、かなり語学の達者な人であつたと思はれるのであるが。

それはともかく、以上の推定には、『小説管窺録』の次の記事が参考になる。併せて、『神枢鬼蔵録』の内容をも窺ひ知る資料であるから、一寸掲げて置かう。文中に加へた原作品名は、筆者のさかしらである。

神枢鬼蔵録 商務印書館発行

林紓，魏易同訳。自序謂独未訳偵探一種，尽十余日力訳成。又云，「読海上所訳包探諸案，則大驚喜」云云。六案分上下兩卷，細細檢之，即本社上年所發行之『馬丁休脱偵探案』也。対核如下；

「窗下伏屍」即「以維考旦其秘密案」(五案)

The Ivy Cottage Mystery.

(II-No. 1)

「霍而福德遺囑」即「哈爾富特遺囑案」(十一案)

The Holford Will Case. (II-No. 3)

「断死人手」即「燒手案」(七案)

The Case of the Missing Hand. (II-No. 4)

「獵甲」即「銀行失竊案」(十案)

The Case of Laker, Absconded. (II-No. 5)

「非次魯乙馬圈」即「瘋人奇案」(八案)

The Case of the Lost Foreigner. (II-No. 6)

「海底亡金」即「聶可勃銀箱案」(九案)

The Nicobar Bullion Case. (II-No. 2)

尚有五案，未經林君訳出。想本社所印本，林君未曾寓目，否則不為此駢拇枝指之舉也。久擬輯一訳小説検査表，將原書名，原著者，今定名，出版年月，訳者姓氏，全書大意一一詳載，惜事冗因循未果，如成，必有裨於訳者。

『訳書には，原著者・原書名・出版書肆を明記させ，新聞紙上に広告し，毎年聯合総目録を編輯出版せよ』との意見は，東海覚我も提唱するところであつた⁴⁾が，清末時には殆んど実行されず，為に今日では原典の追究が至難の作業となつてゐることは，更に多言を要しない。現に，蒲梢⁵⁾の『漢訳東西洋文学作品編目』(1929年，真美善書店刊)が、『神枢鬼蔵録』の原典を“ The Hole

4) 東海覚我「余之小説観／四，小説之題名」(阿英編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』所収)。もつとも、『小説管窺録』の筆者は詳らかでなく，東海覚我を含む数人が，交替で執筆した可能性がある。とすれば，或いは彼此同一人であるかも知れない。

5) 「蒲梢」の本名については，「徐調孚」(袁湧進編『現代中国作家筆名録』)・「曾虛白」(橋川時雄編『中国文化界人物総鑑』)・「曾樸」(馬泰来「林琴南所訳小説書目」)の三説があつて，必らずしも明確ではない。これについて，樽本照雄氏が曾虛白氏に質したところ，「漢訳東西洋文学作品編目是否拙作。本人從未著手此項著作，橋川先生頗有誤會。至蒲梢何人，實非素識」といふ返信を得られてゐるから，同氏はもとより曾樸説も否定さるべきか。徐調孚(1898—?)は，浙江乍浦の人。「文学研究会」に属し，『文学週報』・『小説月報』の編輯に従つた。児童文学作家として著はれ，『木偶奇遇記』・『日本故事集』・『我的童話集』等がある。因みに，蒲梢には，「漢訳東西洋文学作品編目」(張静廬輯『中国現代出版史料』甲編所収)の他に，「初期新文芸出版物編目」(同上)・「中訳蘇俄小説編目」(同・乙編所収)がある。

in the Wall”と誤認して以来、寒光の『林琴南』・朱羲胄の『春覚齋著述記』(『林畏盧先生学行譜記』四種之二)・楊家駱の『民国以来出版新書総目録提要』・国立中央図書館編『近百年来中訳西書目録』・韓廸原『近代翻訳史話』(翻訳理論叢書之二)等々凡てその誤りを踏襲し、僅かに馬泰来氏の「林琴南所訳小説書目」(『出版月刊』第二卷第十二期)が“*Adventures of Martin Hewitt*”?——つまりヒューイット探偵談の第三集かと疑問を投げかけてゐるけれども、これ亦正確ではない。モリスンの第二探偵小説集『マーティン・ヒューイットの事件簿』の完訳で、その第二話を巻末に置き換へただけのものであることは、上に示すが如くである。

最後の『海衛偵探案』も、蒲梢が“*Tales of Mean Street*”とするのは誤りで、第三探偵小説集『マーティン・ヒューイットの冒険』から第一話「フリッターバット・ランサーズ事件」(“The Case of the Flitterbat Lancers.”)を除いたものに、第一探偵小説集『探偵マーティン・ヒューイット』中の二篇、第二探偵小説集『事件簿』中の一篇を加へ、計八篇を訳出したもので、その内容は、



| (華訳名) | (原作名) | (作品集略号) (作品番号) |
|-------|---------------------------------------|-------------------|
| 医生冤 | The Case of the Late Mr. Rewse. | III-No. 4 |
| 船主斃命 | The Case of the Dead Skipper. | III-No. 2 |
| 妒婦洩機 | The Case of Mr. Geldard's Elopement. | III-No. 3 |
| 少婦竊児 | The Affair of Mrs. Seton's Child. | III-No. 5 |
| 癩人 | The Case of the Lost Foreigner. | II-No. 6 |
| 秘密魚雷凶 | The Case of the Dixon Torpedo. | I-No. 4 |
| 彫壁 | The Stanway Cameo Mystery. | I-No. 6 |
| 麦德里礼堂 | The Case of the Ward Lane Tabernacle. | III-No. 6 |

の如くである。ヒューイットものは、短篇十九篇、続き物一篇六話があるが、これで短篇のうち十六篇が華訳されてゐることになる。就中、「迷子の異邦人事件」“The Case of the Lost Foreigner.”の如き、三人とも共通にこれを

訳してゐるのは、当代に於ける虚無党小説の流行と、関係があるに違ひない。今、ここに奚若訳を比照することが出来ぬのは残念であるが、後二者による同一個所の一節を、訳例として掲げて置く。蓋し、原書初印本三百二頁七行以下三頁ほどに該当する。

希威志檢其紙。方審省，忽見其人徐步進牆隅乱草上。希威志如有所悟，擲紙力挽其臂，不聽行，即以人授我曰，汝守其人勿動，此乱草中吾未之檢閱。言已遂掀其草，草尽有麻布一片，中覆麪包一巨塊，凡十二方聯為一塊者，与車中麪包無別，但以底仰向。希威志曰，在是矣。爾可勿動。遂復檢取地上之紙曰，此紙能愬我，省我四覓也。謂余曰，白勒志我方欲告汝，以搜索急故不能遽言。汝今試觀此二書，此書中即無君党埋放炸彈之人也。此仰翻之麪包，每塊中必納一炸彈。此彈名曰反面炸彈，偶一翻之，藥即立発，一動人与屋俱燼矣。今爾試往覓一四輪之車，引車直至門内，能避人耳目者為尤佳。余出，果得車。余此時悟車中所以用彈簧之墊，即防彈炸。此人決為無君党，可以不疑。是必製此後，分遣其党人四嚮部署，同時舉事，深可駭也。余曾聞此彈至凶險，無待一繩之微火，中存強水之管，就中生熱，発電。今倒置者，強水下注，不復騰上，若立反之，則強水之性即発，藥炸矣。夫以麪包納炸彈，可於光天化日之下，攜之往反，弗生人疑，大致須與之間，必分党徒四出，翻其麪包於要害之處，藥必数分鐘始発，叛党尚可倖逃，其為計巧矣。其以彈簧之褥襯麪包者，正防其震撼而発其電，且眞麪包必斜排而堅擠之，俾勿遽動，亦其用心縝密之處，若拋今而論，事体了了。唯不審希威志胡以至此，則為余所不敢知。（林訳「非次魯乙馬圈」）

海衛急視其紙訖，乃挽罪人之肩，使之離其所立處，其下為乾草一堆。曰，吾等尚未查勘此地，乃俯身至屋隅，揭去乾草，而囊布現。再揭其布，則余等所前見之麪包，又歷歷在目矣。每一方為十二塊，所異者麪包之底皆向上，一一倒置。海衛曰，得是足矣。然宜自慎，切不可悞觸之。乃以罪人袋中之紙示余曰，此紙益吾事不少矣。拉脫君，試讀此紙之一二字，即知為虚無党与炸彈之事。吾早料此麪包之中，必藏有炸彈。然脫無此紙，吾事尚不能如是順手也。今請君出雇一四輪車。但須慎密，勿為他人所見。余即從言雇車。蓋所見之麪包貨車，及彈機之墊，至是始明其故。虚無党人，曾有同時

挙行炸彈之計者。余固嘗聞之，党人所用之彈，皆係倒彈。彈中有一管，內盛醋酸，塞以棉絮，炸時不用引火。但以彈倒置之，其藥猝發，今則製法愈精，以彈納麩包中，載諸貨車，可随处分送。雖光天化日之下，更無人能決其隱者。舉事之日，祇須一人倒置其麵包於僻靜之區，置畢引去，數分鐘間，炸彈發矣。至於車中之彈機墊，所以防錯酸受車之振擊而爆發，而其長麵包橫置車之兩端，不實以彈，亦所以護其他有藥之麵包也。以余觀之，此事甚明，但不識海衛之意当作何解耳。

(商務・編訳所訳「癩人」)

(2) 林訳小説に見る探偵小説

(A) ボドキンとオルツィ

『神枢鬼蔵録』は、林琴南自らも序文に記してゐる様に、彼としては最初の探偵小説の翻訳であり、次いで上述の『歇洛克奇案開場』の訳出となる訣であるが、彼にはこの他にも尚幾つかの探偵小説の翻訳がある。

| (華訳名) | (原作者名) | (訳者) | (発行所) | (刊年) |
|--|---------|---------------|-------------|------------------|
| 貝克偵探談(初編) | 馬克丹諾保德慶 | 林琴南 陳家麟 合訳 | 商務 | 宣統元年 月 (1909) |
| (M. McDonnel Bodkin: <i>The Quests of Paul Beck.</i> 1908 ?) | | | | |
| 同 (続編) | 同 | 同 | 同 | 民國三年六月 (1914) |
| (Ibid: <i>The Capture of Paul Beck.</i> 1909 ?) | | | | |
| 十 万 円 | [佚 名] | | 上海偵探 小説社 | 民國八年七月 (1919) |
| (未見。原作者・作品名共に未詳) | | | | |
| 少郎喋血記 | 阿 克 粹 | 林琴南 陳家麟 合訳 | (未 刊) | |
| (未見。Orczy の作品だが，原作未詳。) | | | | |

『貝克偵探談』の作者ボドキン(M. McDonnel Bodkin.)は、アイルランドの弁護士で、晩年は推されて勅選弁護士(Queen's Counsel)となつた。博識多才、法曹界・政界に活躍して重きをなしたが、傍ら文筆をよくし、多くの著書を残した。それも『無軌道な結婚』(“*A Madcap Marriage.*” 1906)・『著聞するアイルランドの裁判事件』(“*Famous Irish Trials.*” 1918)・『有罪か無



罪か』(“*Guilty or Not Guilty.*” 1924) といった専門の司法関係の著書から、自伝的回想録『一アイランド判事の回想』(“*Recollections of an Irish Judge.*” 1914)・『ゴールドスミス時代』(“*In the Days of Goldsmith.*” 1903) といった文学・歴史に跨る著作、それに長短合せて廿数篇の小説と極めて多彩である。その小説にしても、『エドワード・フィツジェラルド公』(“*Lord Edward Fitzgerald.*” 1896) の様な重厚な伝記小説もあれば、『手品』

(“*White Magic.*” 1897)・『当代ロビン・フッド』(“*A Modern Robyn Hood.*” 1903) といった肩の凝らない読み物、将又「ポール・ベックもの」と呼ばれる一連の探偵小説もあるといった按配で、正に縦横無尽といった観がある。勅選弁護士肩書きを有つ人で、探偵小説にまで筆を染めた人は、彼を措いては、他にあるまい。

彼が産み出した親指探偵ポール・ベックは、風変りな探偵であつた。若いのに似合はず太つちよで、赤ら顔、縮れた褐色の髪に、剽軽な目鼻だち、どう見ても牛乳配達夫か何ぞで、探偵らしい面影は何処にもない。その探偵法にしても、ホームズのそれとは正反対、直観よりは常識を重んじ、天才的な閃きよりも熟達した経験に (by rule of thumb) 物を言はせるといふ。その第一作に、『経験法探偵ポール・ベック』(“*Paul Beck, the Rule of Thumb Detective.*” 1898) と題する所以である。作者は、ついで『女探偵ドーラ・マール』(“*Dora Myrl, the Lady Detective.*” 1900) を書き、巻末で彼女をポール・ベックと結婚させたが、最後の『若きベック』(“*Young Beck.*” 1911) では、二人の間に生れたポール・ベック二世を活躍させる。女性探偵の登場は、作者不明の『一女性探偵の体験』(“*The Experiences of a Lady Detective.*” 1861) あたりに遡り、ペチコート警察官ミセス・パースカル (Mrs. Paschal) の物語以下、ドーラ・マールが登場するまで幾篇かあるが、それらは主人公を男性から女性に置き換へただけのものにすぎない。ボドキンは、それを一步進め新しい展開を試みたので、かくて以上の三部作は、「ミステリー小説の中に誕生し

た初の探偵一家の物語」となつたのである。⁶⁾

ボドキンは如上の三部作を書く間にも、短篇集『ポール・ベックの探偵談』(“*The Quests of Paul Beck.*” 1908) や『ポール・ベック捕り物帖』(“*The Capture of Paul Beck.*” 1909) を書いた。林琴南が訳したのは、この二書であらう。今、筆者のノートの不備で、各篇の原題名を示すことが出来ないのは遺憾であるが、華訳には、初編に「尸言」・「因微見著」・「珠宝墜水」・「西班牙罪人」・「毬場伏尸」・「紅玉被盜」の六篇、統編には「手隠不見」・「血印」・「破案迅捷」・「鬼海」・「窮盜所往」・「舟行紀程」の六篇を取める。以下、訳例として、「毬場伏尸」の一節を掲げる。

徳人聞之、頗驚訝。貝克且曰、吾自覓得小毬時、已思得一事。君亦知打毬中有所謂鈎魯甫之戲乎。徳人曰、知之。貝克曰、既知此戲。則自知一事。君当知吾在第二毬場中、得此小毬、即知沙木敦金必未至第二毬場之遠。果人至第二毬場、則此毬必遠越、不能即落第二窟中、計沙木之立、必在絶遠之地。毬行而沙木已為人撲。吾尤至第二毬場窟次、已頗得二人争競之痕迹。雖足印所及、痕迹都平。然自吾眼中覘之、固了了可弁、以間花野草、為人所拔、似痛極執之以自救者。其旁石上尚模糊有血痕。吾因之推求此人死時、又必在第二毬場之上、既死則移尸至於第十七場中、吾思索必属包魯滕所殺、徳人曰、否否。汝言包魯滕七点半尚在客寓、而死人之表針、則八点有半、始死。寧能謂謀者即為包魯滕。貝克以目視。徳人曰、先生恕吾罪。若果為偵探家、亦必居上列、所發問者、蓋至細切、此表偽也。徳人訝曰、表胡能偽。貝克曰、先生不悉吾言、吾覘表時、玻璃破而表面乃無損、而表弦又斷、相之、非擊時所斷、握而斷之也。此兇手行事乃至巧無倫、必取表移其針至於八点有半。針定則斷其弦、即恃表而行其偽。先生以為如何。

『十万円』及び『眇郎喋血記』は、朱羲胄の『春覚齋著述記』によつて、その存在を知り得るもので、後者には「稿存商務印書館、未刊」といふ注記がある。何れも未見の為多くを語るを得ないが、後者については、一寸触れて置く必要がある。

6) Ellery Queen: “*Queen's Quorum.*” p. 17, p. 41.

この原作者「阿克粹」は、オークシイと訓むべきものであらう。オークシイは即ちオルツィ(Emmuska Baroness Orczy. 1865-1947)で、英語風に発音表記したものと考へられる。訳者には、別に『英国大俠紅縹露伝』(後述)の訳があるが、そこでは「^(マツ)法国男爵夫人阿克西」としてゐる。とすれば、その原典は「隅の老人シリーズ」と呼ばれる三つの短篇集——『隅の老人』(“*The Old Man in the Corner.*” 1909)・『ミス・エリオット事件』(“*The Case of Miss Elliott.*” 1905)・『解かれた結び目』(“*Unravell'd Knots.*” 1925)——か、乃至は『スコットランドの婦人部長モーリィ嬢の探偵談』(“*Lady Molly of Scotland-Yard.*” 1910)あたりを求むべきであらう。『解かれた結び目』に収める「メイダ・ヴェールの守銭奴」(“*The Miser of Maida Vale.*”)の百万長者ソントン・アシュリーの長男は不具者だつた筈であるが、^{すがめ}眇眼であつたかどうか。

原作者オルツィ——我が国では、一般にかう呼ばれてゐる⁷⁾——は1865年、ハンガリーのタルナオールズで生れた。その家は、ハンガリー創建当時の国民的英雄アルパード(Arpad. ?-907)の時代まで遡ることが出来るといふ由緒ある家で、父フェリックス・オルツィ男爵(Baron Felix Orczy)は作曲家乃至は指揮者として令名があり、ワグナー・リスト・グノーなど著名な音楽家も、よくその家に入出たといふ。少女時代、農民暴動の難を避け、一家はブリュッセル、ついでパリと居を移し、同地で初期の教育を受けた。1881年ロンドンのヒザリ美術学校に進んで絵画を専攻し、ロイヤル・アカデミーにも数回出品したことがあるといふ。1894年、彼女は美術学校で知り合つたモンターギュ・バーストウ(Montagu Barstow)と結婚し、英国に帰化するが、暫らくは平凡な主婦の生活を続けてゐたらしい。

彼女が、小説に手を染めたのは四十歳近くにもなつてからで、処女作『皇帝の蠟燭立て』(“*Emperor's Candlestick.*” 1899)で、いちはやくその才能を認められた。次いで夫と共に創作した戯曲『紅はこべ』(“*The Scarlet Pimpernel.*”)

7) Orczy は、我が国では普通オルツィと表記され、この方が通りがよいが、彼女を英国の作家と見る立場から、英語風にオークシイと記す人もある。しかし、手許の“*Webster's Biographical Dictionary.*”でも、<ôr'tsi>と発音表記してゐるから、今は旧に従ふ。

は、1902年上演されて非常に好評を博した。彼女は、1905年これを小説に書き改め、息つく間もなく一連の「紅はこべもの」を書いた。彼女の本领は、むしろこれら一連の作品にあると言つてよい。その自伝『命の絆』(“*Links in the Chain of Life.*” 1947)の中で、『隅の老人』に触れるのは僅かに二個所であるといふのも、彼女自らが、探偵小説家と目されるのを、厭うてみたからに他なるまい。それにも不拘、彼女は、五十篇近くもの探偵小説を書いたのであつた。

彼女は、この分野で、「安楽椅子の探偵」(Armchair detective)といふ一つの型を定着させた。勿論、その先蹤としては、ポウの「マリー・ロジェの謎」(E. A. Poe: “*The Mystery of Marie Roget.*” 1841)に登場するオーギュスト・デュパンやシールの『ザレスキー公爵』(M. P. Shiel: “*Prince Zaleski.*” 1895)で語られる公爵その人がある。が、これを一つの型として定着させたのは、彼女だと言つてよい。——ロンドンは、場末の何処にでもある様なパブの隅に、何時も定まつた席を占めてこの老人は坐つてゐる。格子縞のアルスター外套を着て、大きな角縁の眼鏡をかけ、細長い首と大きな耳が異様に人の目を惹く。この老人の氏も素性も、読者には語られない。彼は、何時も複雑に結んだ紐を解きほぐしながら、婦人記者ポリー・バートン嬢が持ち込む迷宮入り事件を、次々と解明してしまふ。時として、彼は事件現場を検証したり、裁判を傍聴したりする事はあるけれども、殆んどの場合は事件の傍観者と言つてよく、素人探偵の立場を崩さない。まことに面白い設定だが、舞台が「ABCショップ」といふ限られた場所だけに動きがなく、プロットは固定化され勝ちである。その辺に、作品の限界がある。例へば、作者は、「パーシー街の怪死」(“*The Mysterious Death in Percy Street.*”)で、犯人は実は「隅の老人」であつたことを暗示するが、これは『探偵乃至は警官を犯人に仕立ててはならない』といふ探偵小説作法の原則に抵触するものと言つてよい。とはいへ、その作品が短篇で雑誌向きであることから、我が国では大正末年から昭和の初期にかけて、約四十篇が『新青年』や『新趣味』に訳載されたし、最近では、「ホームズのライバルたち」を改めて見直さうといふ立場から二三の新訳も上梓されてゐる。⁸⁾

かうした我が国の実情に較べると、中国でのオルツィの紹介は、驚く程早い。林訳小説ではないが『繡像小説』第六十期から第六十二期（光緒三十一年九月一同十月。1905）にかけて連載された『三疑案』がそれで、樽本照雄君の示教によれば、それぞれの原作は次の如くである。

| (華訳名) | (掲載誌号数) | (原 作 名) |
|-------|---------|---------------------------|
| 伊蘭案 | (六十期) | The Case of Miss Elliott. |
| 雪駒案 | (六十一期) | The Housing of Cigarette. |
| 跛翁案 | (六十二期) | The Lisson Grove Mystery. |

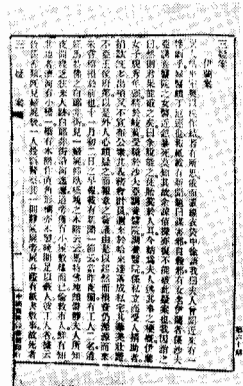
この三篇は、「隅の老人シリーズ」の第一短篇集『ミス・エリオット事件』⁹⁾に収めるものであるが、同書が T・フィッシャー・アンウイン社 (T. Fisher Unwin, London) から出版されたのは、1905年すなはち光緒三十一年のことだから、華訳されたのは極めて早いことになる。或いは、初出の『ロイヤル・マガジン』(Royal Magazine) から直接訳出されたのではないかと、疑はれるばかりであるが、何れにしても外国訳された最初のものといふ榮譽は、この華訳に与へられてよささうである。因みに、華訳が『繡像小説』に掲載された時には、原作者の表記が示されなかつたが、光緒三十三年(1907)単行上梓されて、『袖珍小説』に収められた時には、「英国奥姐」と明記された。訳文は勿論大意であるが、勘所は押へてあり、訳者が決して凡手ではなかつたことを想はせる。珍らしいものであるから、冒頭の一節を掲げて置く。

8) 山田辰夫・山本俊子訳『隅の老人』(ハヤカワ・ミステリ文庫, 昭和五十一年十月), 深町真理子訳『隅の老人の事件簿』(創元推理文庫, 同五十二年八月)など。後者に添へられた戸川安宣氏の解説「シャーロック・ホームズのライヴァルたち——隅の老人と生みの親オルツィ」は、得るところが多い。

9) 'This is the only instance we know of where first-written tales were published after second-written ones.' (Ellery Queen: "Queen's Quorum." p.55) と指摘されてゐる様に、『隅の老人』("The Old man in the Corner.", Greening, London, 1909) 所収の作品は、例外的な "The Mysterious Death in Percy Street." を除き、その発表年月が、『ミス・エリオット事件』("The Case of Miss Elliott." T. Fisher Unwin, 1905) 所収作品のそれよりも古い。従つて、『隅の老人』を第一短篇集とすべきだとする説もあるが、刊行が遅れてゐる以上、書誌的に抜つて第二短篇集とすべきであらう。もつとも、さうなると「隅の老人もの」といふ呼称は、いささか不安定な観を与へることになるけれども。

伊 蘭 案

異人枯坐室奥，以線作結，若有所思。俄而置線衣袋中，徐語我曰，夫人曾聞近来有一慘劇乎。婦医頗丁厄運也。報紙載有新聞，題曰謀害邪，自殺邪。有女名伊蘭者，係沙夫亞調養醫院之女医，近忽暴死，莫知其故。余諒偵探亦復不能破此疑案也。我因誚之曰，然則君果能破之矣。曰余脱能之，徒貽笑於人耳。今姑為夫人述其事之梗概。伊蘭女子，貌秀年強，精於岐黃，受職於沙夫亞調養醫院。調養醫院，係私立而受人捐助者，捐款既多，出項又不宣布公案。其義務會計員，邇來於哈來達落成私宅。其華美壯麗，不亞王侯府第。以是外人心頗疑之，而報章訾議，由是以起。然而捐資之源源而來，未嘗稍損於前也。十一月初二日之早報，載有新聞一節云。当昨夜闌，有工人二名，道經馬特仏之白郎非街，見一婦屍，仰臥橋堦之木階云云。馬特仏地頗僻靜，夫人所知，夜間幾乏往來人跡。白郎非街沿河迤邐，道傍僅有小屋數椽而已。倫敦市人，鮮有知其地者。濟河有小橋一，橋有木階，作直角形。欄亦木製，晚間足以蔽人。彼工人者，拋云皆係善類。既見婦屍後，一人投訴警察，其一則靜候屍旁。屍身賸有紙書數事，故死者之名不雖查悉，且伊蘭名譽素隆，交遊亦廣，卦音至勉，聞者無不驚愕。僉云自戕之詭秘，莫此若也。



(B) オップンハイム；アレン・アップワード；ブースビー

探偵小説が、一方で政治小説・軍事小説と結付く時は、スパイ小説 (Espionage) が生れようし、他方で冒険小説と結付く時は、冒険探偵小説 (Adventure Detective Story) となるであらう。政治小説も末流のものになると、政界の暗黒面を暴き出して快を貪るピカロ的なものとなるし、冒険小説の類は、もともとピカレスク (Picaresque) とは関係が深い。これらは、純粋な意味での探偵小説ではないが、相抛り相援け合つて、清末民初に流行した譴責小説・黒幕小

説に密接な関接を有つものとなるし、冒険小説の類は旧来の武俠小説に影響を
与へたに違ひない。林訳探偵小説を語つて尚一二補足すべきは、彼の訳出した
小説中に、さうしたものに相渉る作品が、尚若干あることである。

まづ、前者に属する翻訳としては、次の様なものが挙げられる。

藕孔避兵録 美・裴立伯倭本翰著 林琴南魏易合訳 商務 宣統1年
(1909)

(E. Phillips Oppenheim: 原作未詳——未見)

略史 法・亜波倭得著 林琴南陳家麟合訳 商務 民国9年2月
(1920)

(Allen Upward: "Secret History of To-day: being revelations of
a diplomatic spy." 1904)

俄宮秘史 魁得著 林琴南陳家麟合訳 商務 民国10年5月
(1921)

(原作者・作品名未詳——未見)

『藕孔避兵録』の作者オップンハイム (Edward Phillips Oppenheim. 1866-1956) を米国人とする (阿英氏の書目による) のは誤、英国籍の作家である。処女作『罪滅ぼし』("Expiation." 1887) は余り注目されなかつたが、『不思議な男サバン氏』("Mysterious Mr. Sabin." 1898) を書いた頃から人気を集め、コナン・ドイルと共に『ストランド誌』の常連作家であつた。作品は極めて多く百篇を越すが、その大部分は冒険乃至は政界の黒幕小説で、純粋な探偵小説といふべきものは極めて少ない。その代表的な探偵小説とされる『探偵アルジャーノン・ノックス』("The Hon Algernon Knox Detective.") にしても、外交裏面の葛藤や秘密諜報機関の暗躍に多くの筆が割かれ、探偵・推理の面白さや犯罪の追跡は、隅の方に押し遣られた観がある。我が国でお馴染みの『日東のプリンス』("The Illustrious Prince.") にしても同様で、日英同盟更新問題の蔭に隠された日米の葛藤、日本の国民性の扶別などの方が、読者の興味を惹く。とは言へ、作者に探偵小説のあることも、亦否定し得ないのであるから、林琴南にこの訳があることは、注目されてよい。不幸にして、訳本を未だ見る機会がなく、原作の追求も手掛りを得ることが出来ないけれども。

因みに、オップンハイムの作品は、これ以前にも紹介されてゐる。阿英氏の書目に、

黄鉛筆 英・斐立潑斯著 章仲謐章季偉合訳 四十三回 光緒三十三年
(一九〇七) 小説林社刊

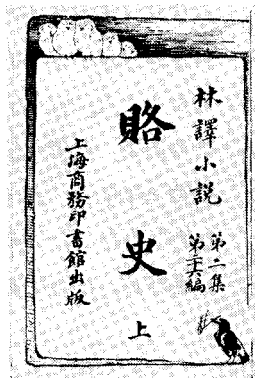
とあるのがそれで、これも未見ながら彼の代表的探偵小説の一に数へられる『黄色いクレヨン』(“*The Yellow Crayon*”)であることは、疑問の余地がない。蓋し、『小説管窺録』に、

黄鉛筆 上下二冊全 本社発行

英・斐立潑斯著 無錫章仲謐・季偉同訳。書述索師烹奴公爵之夫人魯西、忽不別他去。公爵追之。至紐約、為警吏所窘、幾誤行期。旋至倫敦。時英京貴族有一同盟會。奉王子李尼索為首領、以反對民黨、會中以黃鉛筆為記。民黨首領為勃洛脫。魯西亦為貴族黨、有殊色、李尼索令其偽名為伯爵女公子來際、以結交勃洛脫、使轉移其政見。勃洛脫惑之、卒為民黨人所戕。李尼索亦欲娶魯西、魯西願從公爵、蓋與公爵在倫敦已晤數次矣。公爵至柏林、見德皇、因德皇為黃鉛筆會之會長也、面陳王子不法狀、會遂解散、王子逃往南美洲。公爵夫婦復璧會。訳筆雅飭、處處發明政治實際、貴族與平民之衝突、於中國前途、足引為龜鑑焉。

と、その梗概を記してあるからである。華訳者が、オープンハイムの名フィリップスを姓と誤つて、「斐立潑斯著」とするのは御愛嬌であるが、我が国でもオルツィを「隅の老人」の名前と勘違ひし、作者をジョセフ・ルノオ(仏訳者)として紹介した例があるから、一概には笑へない。とはいへ、『管窺録』の筆者が言ふ様に、優れた翻訳であつたかどうかにも、疑問があらう。蓋し、オープンハイムの文章は非常に暢達したもので、構想にも無理がなく、政治・国際問題の分析も明快であることは、固り定評があるところで、若し華訳が成功したとすれば、原作に負ふところが尠くなかつたと見られるからである。

『略史』の作者アレン・アップワード(Allen Upward. 1863-?)は、我が国では、徳富芦花訳『外交奇譚』(“*Secrets of the Courts of Europe.*” 1897)の原作者として、記憶してゐる人が尠くないであらう。ロンドンの名門校ミドル・テンプル(Sch. Middle Temple.)やブルーク校(Brooke Sch.)で法律・哲学を修め、弁護士を業としてゐ



た。¹⁰⁾ その著『陪審裁判と労働運動』(“*Trial by Jury and the Labour Movement: a plea for reform.*” 1891) は、二十四頁の小冊子ながら、草創期の労働運動に正しい指針を与へるものとして、高く評価されたし、『公用について』(“*On His Majesty's Service: the story of tariff reform.*” 1904)・『政治のロマンス他二篇』(“*Romance of Politics. ; The Fourth Conquest of England. ; A Sequel to Treason.*” 1904) などは、物語風に英国の当面する政治課題を解明したのものとして、尠からぬ読者を集めた。文壇には、当初、詩人として知られ、詩集『ジックラークにて歌へる』(“*Songs in Ziklag.*” 1888)・『今日の悲劇』(“*A Day's Tragedy., A Novel in rhyme.*” 1897) によつて、吟遊詩人賞(Hon. Bard Nat. Gorsedd.)を獲たが、幾許もなくして小説に転じ、専ら政治小説や国際スパイ小説の類を書いた。彼には、『歐洲のイースト・エンド』(“*The East End of Europe: The report of an unofficial mission to the provinces of Turkey on the eve of the revolution.*” 1908) といふ著書もあつて、密命を帯びて中東で活躍したことがあるらしいが、それだけにスパイ小説は彼の最も得意とするところであつた。『現代秘史』(“*Secret History of To-day: being revolutions of a diplomatic spy.*” 1904) は、さうした彼の作品中でも最も力を注いだものといつてよい。日露戦争前後の歐洲政界を背景としたこの国際スパイ小説には、当然のことながら、当時世界を震撼させてゐた露国虚無党の面々が登場するし、我が国でも迎へられてよい筈であるが、何故か日訳があるのを聞かぬ。華訳は、

武伊武(即亞波倭得)曰、英明之主、固允我絃此一段之事。主曰、武伊武能絃北海之承平事、則愈足以堅英俄二国之交誼、同臻於承平。然余之為此書、而書中之人、恆不欲余述其真名。此事匪余所欲、即余名亦假託。何況諸君、此書出後、而書中假託之姓名、亦不曾有怪我之処、滋可幸也。余在日俄戰之第一年冬日、忽得一書、着余至倫敦、赴巴欽漢姆宮、面畢打利公爵。余亦忘其為何日、以余亡其日記之本。其不敢登之日記者、以余在巴黎中、遇一警察長、覘余秘密。蓋簿中与摩洛哥国王、伝電之密碼、為警察所得。自

10) “*Who's Who in Literature*”, 1927. p. 488. etc.

是遂不復記。公爵者，与余為老友。既見招入，定必有事奉屬，不能不赴。吾此時尚在巴黎也，而偵探之總樞，亦在於是。知此行必需時日，遂挈一秘書，匆匆至倫敦。道中細語秘書，屬其部署吾事，以塞維亞新王，与巴路極雷亞王，方言和，定新約也。語次火車至义林克老司。余不欲人知吾行動，令秘書勿起送余。余竊下登馬車。此馬車蓋余予以電示公爵，故公爵以車迎。既上馬車，直至逆旅。旅館在斐卡地婁，車過司考羽波街，余按車鈴，御者停驂。余即令移趨巴欽漢姆宮，以余行動，初不令一人知，明言赴旅店，乃偏不赴，防人尋迹耳。既至面公爵，公爵語至簡約，言曰，武伊武，汝知俄国将与日本宣戰乎。余曰，此戰決開，竊觀两国情勢，万不能弭禍於無形。公爵不懌曰，若以爾行，亦将不能力挽此危局矣。余曰，即行無濟也。公爵以目視余曰，苟与爾以全權，且佐重金，往面聖彼得堡宮中乘樞拋勢之人，為之閃說，能弭此禍乎。 (第一章)

といった調子のもので、林訳小説としては比較的平易な訳文である。『俄宮秘史』は書名から推して、これ亦、虚無党小説と考へられるが、未見の為、原作を追究するに至らない。

次に、冒険探偵小説に類するものとしては、

大俠紅縷路伝　阿克西夫人著　林琴南合訳　商務　光緒三十四年九月
魏易　(1908)
(E. Orczy: "The Scarlet Pimpernel." 1905)

女師飲劍記　蒲士拜著　林琴南合訳　商務　民国六年七月
陳家麟　(1917)
(G. Boothby: "In Strange Company., A Story of Chili and Southern Seas." 1896? 後考を俟つ。)

の如きがある。『大俠紅縷路伝』を、阿英氏の書目に洩してゐるのは疎漏で、『大俠盜郡洛屏』・『大俠錦披客伝』など類似した書名が他にあるからであらう。『晚清小説史』や『晚清文学叢鈔』・「小説戯曲研究卷」にもその名を録し、殊に後者では林序の全文を掲げてゐる。それに従へば、林琴南は、本書を歴史小説と見てゐたことは明らかで、冒険小説とも見てはゐなかつた。それはそれでよいのであるが、原作者は如上の『隅の老人』シリーズで、探偵小説史上にも足跡を残してゐるし、又『紅はこべ』の主人公パーシィ・ブレイクニー卿の神出鬼没の行動には、多分に探偵小説的な興味がつきまといふのであるから、記憶

に止めて置いてよい。因みに、我が国での『紅はこべ』物の紹介はかなり遅れ、大正も末になつてからのことである。国立国会図書館『明治・大正・昭和翻訳文学目録』には、植松正訳として、紅玉堂書店版（大正四年）・金剛社版（大正十五年）を掲げ、原書として（“*The Scarlet Pimpernel*”）を挙げ、これに従ふ研究書もあるが誤りである。正しくは、『トニー卿夫人』（“*Lord Tony's Wife.*” 1917）、その前半を『紅はこべ』、後半を『恐怖の巷』（金剛社、共に大正十五年刊）とすべきである。訳者は、知る人ぞ知る一橋大学名誉教授、刑法学者として又NHKテレビの解説者として著聞する植松正先生その人で、先生が十九歳、苦学しつつ日本大学予科（夜学——当時は日本大学にしか夜学はなかつた）に通学して居られた頃の小遣ひ稼ぎであつたと聞く。¹¹⁾

『女師飲劍記』は、

時有二入、一為英産、一為西班牙。此二人種類不同、性質亦異。然亦間有同者。其不同者、英人長瘦而訥、雅有謙徳。西班牙人、則侏而胖、喋喋有利口、性尚風華、此其不同也。其同者、則趨捷善鬪、悍不畏死、均放浪於江湖間、相識已數年。然往來不數數也。其所以相識而寡於往來者、正自有故。令且先敘英人。英人名安粗色、為要克之少年、聰明解事、顧乃不習於正。曾在伊登學校、肆業一切功課。初不屬意、則專留意於體育、既而又至阿克司弗得大學^{即牛}、未數日、為校長除名。其父大怒。一日其子負責於外、責家索、逋其父謂安粗色曰、我乃不幸以爾為子、直劣物也。安粗色曰、人固有過。徐當改之。自是以來、父不以為子、而安粗色亦漠視其父、後此其父賜之二百鎊金、斥其遠離、蓋逐之也。安粗色挾金出英國至南斐州乃覓路不得。復由南斐至於南美之智利國。國正革命、安粗色遂入其黨乃不克奏功、怏怏至巴國。

に始まる小説であるが、恐らくは馬氏の指摘する“*Love Made Manifest*”ではなく、『奇妙な仲間に加して』（“*In Strange Company, A Story of Chili and the Southern Seas.*” 1896）ではなからうか。未だ原書を比照し得ないのではあるけれども、チリやウルグアイなどが舞台となつてゐることは、上掲の

11) 植松 正先生「翻訳書奇縁」（『時の法令』No. 997、昭和五十三年四月）。

例文に徴しても窺はれようから。

ブースビィ (Guy Newell Boothby. 1867-1905) は、オーストラリア東南部生れの作家で、若い頃から冒険を好み、その足跡は、濠洲各地は勿論、サモア・フィジーなどオセアニア海域の島々から、チリ・ペルーなど南米大陸の国々、はたまたエジプトから南支南洋と、世界中に及んだ。かくて、当初彼は『オーストラリアの土人—東部縦断記—』 (“*On the Wallaby: or Through the East and across Australia.*” 1894)・『我がオーストラリア』 (“*My Australian Duchess.*” 1903, G. A. Henty との共著)の著者として知られ、又ミステリー風な『幽霊牧童』 (“*The Phantom Stockman.*” 1897)の作者として、大衆に親しまれた。1895年、たまたま『ウィンザー誌』に寄せたニコラ博士の第一作『幸運への入れ札』 (“*A Bid for Fortune.*” 1895)が非常に好評で、求められる儘に、『ニコラ博士』 (“*Dr. Nikola.*” 1896)・『ニコラ博士の実験』 (“*Dr. Nikola's Experiment.*” 1899)・『さよならニコラ』 (“*Farwell Nikola.*” 1901)と一連の作品を書き、大衆小説家としての地歩を固めた。不老不死の靈薬をめぐる、謎の主人公ニコラ博士・国際的大陰謀団・中国の秘密結社などが、上海・中央アジア・ヴェニスと舞台を移しながら、波瀾万丈の死闘を繰返すこの物語は、恐らくアメリカに於けるニック・カーターものの流行に刺戟されてのものであらう。とにかく、「血湧き肉躍る」といつたところがあるから、大いに大衆には受けた。さうした一方で、彼は又『欺偽師のプリンス』 (“*A Prince of Swindlers.*” 1897)を、『ピアスン誌』に書いた。これ亦、ニック・カーターものの影響を受けた作品だが、探偵役をも勤める欺偽師クリモ・アリアス・サイモン・カーンの誕生は、かの怪盗リュバンの登場よりは十年も早い。

ブースビィの作品は、我が国では早くから紹介された。水田南陽が、『魔法医者』 (“*Dr. Nikola.*”)を『中央新聞』に訳載したのは、明治三十二(1899)年五月のことだから、原書の上梓後僅かに三年のことである。が、その後は余り顧られず、大正十四(1925)年、牧逸馬が『白妖姫』 (“*The Beautiful White Devil.*” 1896)を『新青年』に訳載するまでに、細越夏村訳『脱走』(原作未詳、明治三十九年二月、『時代思潮』掲載)その他一二篇があるに過ぎない。これに対して、中国では、紹介こそ日本に遅れたが、かなり多くの作品が訳された。

その嚆矢をなすものは、

| (華 訳 名) | (原作者) | (華 訳 者) | (発 行 所) | (刊 年) |
|---------|-------|---------|--------------------------------------|-----------------|
| 眩 筐 術 | 英・白髭拜 | 烏衣使者訳 | 小 説 林 社 | 光緒卅二年 (1906) |
| 巴黎五大奇案 | 美・白髭拜 | 仙 友 訳 | 『月月小説』 ^{一巻一号} _{以下} | 同上 |

あたりであらう。前者は未見、後者は、当初『月月小説』に、「雙屍案」(一巻一号)・「断袖」(一巻三号)・「珠宮会」(一巻四号)・「情姫」(一巻五号)・「盗馬」(一巻六号)と載されたが、宣統二(1910)年群学社から単行上梓された。

共に原作未詳である。ついで、

| (華 訳 名) | (原作者) | (華 訳 者) | (発 行 所) | (刊 年) |
|----------|-------|---------|---------|------------------|
| 偵探小説 宝石城 | 波斯倍 | 商務印書館訳印 | 商 務 | 光緒三十三年 (1907) |

(“A Cabinet Secret.” 1900 ?)

| | | | | |
|-----------|-----|-----|----|-----|
| 言情小説 復国軼聞 | 波斯倍 | 同 上 | 同上 | 同 上 |
|-----------|-----|-----|----|-----|

(“A Maker of Nations.” 1900 ?)

| | | | | |
|-----------|--------------------|-----|----|-----|
| 言情小説 盜窟奇縁 | ^(浦) 波斯倍 | 同 上 | 同上 | 同 上 |
|-----------|--------------------|-----|----|-----|

(“The Countess Londa.” 1903)

| | | | | |
|----------|-----|--------------|----|------------------|
| 言情小説 海棠魂 | 布斯俾 | 薛一譯 陳家麟共訳 | 同上 | 光緒三十四年 (1908) |
|----------|-----|--------------|----|------------------|

| | | | | |
|----------|-----|------|----|-----|
| 言情小説 青梨影 | 布斯俾 | 陳家麟訳 | 同上 | 同 上 |
|----------|-----|------|----|-----|

| | | | | |
|-------|-----|--------|----|-----|
| 墮 涙 碑 | 布斯俾 | 商務印書館訳 | 同上 | 同 上 |
|-------|-----|--------|----|-----|

といった作品が訳出せられるが、探偵小説の部類に加えてよいのは『宝石城』位で、他は中国でも「言情小説」として扱つてゐるのは、角書するが如くである。

『宝石城』は、安南に赴いた三人のイギリス人が、古城の近くで、宝物を隠した洞穴を発見するが、愆を起した一人は、仲間を裏切つて宝物を持逃げする。しかも彼は、土民を唆して二人を捕へさせる。二人は盲目とされ、又舌を切られて廃人同様になり、辛うじて帰国する。二人の訴へを聞いた探偵は、八方手を尽して犯人の跡を逐ひ、遂に犯人を捕縛するといった筋。インドシナでは、1899年に聯邦が成立、フランスの植民地化が一応の達成を見ると、旧に倍してベトナムやクメール文化の研究が盛んとなる。既にして、アンコールワットの名はムオー(H. Mouhot)の探険(1860年)以来著聞するところであつた

が、前世紀末から今世紀の初めにかけては、アンコールトム遺跡発掘が人々の関心を誘ふ様になる。文豪ピエール・ロチ (Pierre Loti. 1850-1923) の「地下の寺院」(“*Pagode souterraine.*”) や「アンコール巡礼」(“*Un Pèlerin d'Angkor.*”) などは、さうした雰囲気から生れた珠玉の文字である。ロチとブースビィとを同日に論ずるのは、不倫の謗りを免れないが、ブースビィのこの小説の場合にも当嵌る。謂はば、当て込みを狙つた作だが、歴史的にインドシナとは関係の深い中国のことであるから、又格別の興味を以て迎へられたか。『説部叢書』の他に『小本小説』にも収められて流布した。少しく、洞窟探険に向ふ一節を引いて置かう。

啓化徳嘆曰、足下猶弗之信耶。此事固非余一人言之。昔有一支那遊客、曾於某年經過此森林、以甲彼破壞之古城、事後言之歷歷。因顧問可徳曰、可徳、足下曾憶此為何年事乎。可徳応声答曰、此一千二百五十年事也。啓化徳曰、是矣、此支那遊客、曾述此古城歴史、並珍宝之多寡甚悉。黒勒曰、雖然、彼未嘗語人以珍宝所藏處也。吾等安從尋得之。啓化徳曰、無妨、吾有善策、必可得之。君無慮也。蓋吾輩作事、全視乎智慧。苟吾輩而有特識、即疑難之事、何難立剖。可徳曾遂詿此支那遊客之書。其中有言。戎王引彼觀珍異之室、彼一觀此種種奇宝。驚惑之余、至不敢睜目而視、此足徵其言不謬也。其中又有一節、言国王每決獄、必坐於三頭大象之広場中。余等前往、第覓此三頭大象之處。此處既得、再求其他、當不難迎刃而解也。黒勒曰、足下安知此大宗珍宝之仍藏其地、而不為他人所発乎。當其国人去其地而他適、豈獨忘徒其珍宝之理、以吾測之、珍宝必無在也。啓化徳曰、否否、子毋弁、試聽我說焉。當六月以前、余如母曼、邂逅一法国人、彼久客安南、身擁厚資、任意揮霍、余頗怪之、私叩以其資所自來、則曰、余在某地、発見藏錫、其數之多、殆如泥沙。余得任意攜帶。其後為彼處支那人所逐、不能久居。遂逃而至此。吾今將以此冗長故事、約而言之、余後此設計籠絡此法国人。彼遂將藏宝之区、舉以告我。黒勒曰、如君所言、則此事信不處矣。然君烏知此法国人必不再至其地、而尽取其所有乎。啓化徳曰。以吾觀之、此法国人、決不為此。蓋彼乃一嗜酒之徒、無日不飲、每飲必醉。彼囊中資財既足、飲之不暇、何暇跋躄山川、再履其地乎。可徳曰、以余所聞、則此

法国人，早醉死矣。

(第一章)

かうした作品まで数へあげると、林琴南が好んで訳したハガード (Henry Rider Haggard. 1856-1925) の作品などにも言及しなければならなくなつてくるが、それらについては、別稿「林訳哈氏小説攷」に譲る。

(3) ニック・カーター物の氾濫

ブースビィと並んで、いや、むしろそれ以上に大衆に迎へられたのは、ニック・カーター (Nick-Cater) ものであらう。その最初の紹介は、光緒三十二年 (1906)，小説林から上梓された呉門・華子才訳『聶格卡脱偵探案』で、同三十四年までに合計十六冊が出た。以下、阿英氏の書目によつて、その細目を示すと次の如くである。

聶格卡脱偵探案 美・訖克著 小説林社刊

第一冊：呉子才訳。光緒三十二(1906)年刊。収「銀行主人被殺案」・「獅太拒捕」。

第二冊：呉子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「雙生案」・「覬産案」。

第三冊：呉子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「車屍案」・「蓄音案」。

第四冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「復仇案」。

第五冊：滄海漁郎・延陵伯子合訳。光緒三十三(1907)年刊。収「宝刀影案」。

第六冊：延陵伯子訳。光緒三十三(1907)年刊。収「奇窟記」。

第七冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「大里斯案」。

第八冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「戕姉案」。

第九冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「仮面女子案」・「続仮面女子案」。

第十冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「瘋子劫殺案」・「飛刀案」。

第十一冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「戕父劫女案」・「仮王案」。

第十二冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「雷護所案」・「炸彈案」。

第十三冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「姓名名姓案」・「姓名名姓案解決案」。

第十四冊：華子才訳。光緒三十四(1908)年刊。収「紅面党案」。

第十五冊：華子才訳。光緒三十四(1908)年刊。収「一銭酬労案」・「五玉黍案」。

第十六冊：華子才訳。光緒三十四(1908)年刊。収「飛箭案」・「飛艇案」。

光緒三十三年には、一新書局から別のニック・カーターものが出たらしい。

阿英氏の書日には、

聶克卡脱偵探案 美・訖克著 初編、顧明卿訳。二編 顧明卿・顧鵬拳合
訳 光緒丁未(1907)一新書局刊。

を録し、別に

美人唇 美・訖克著 冶孫・不才合訳 中国図書公司刊 光緒三十四
(1908)年刊。

女魔王(二冊) 美・訖克著 小説進歩社編訳 同 宣統元(1909)年
刊 聶克卡脱探案之一

のあることも示してゐる。又、同書目に

玫瑰花下 光緒三十三(1907)年 商務印書館訳印。

とある作品は、原作者名を明示してゐないが、『小説管窺録』に、

玫瑰花下 商務袖珍本

此書亦為聶格卡脱探案之一、發行於上年。旧金山大地震後、有一火車
客蓋敦斐、挾銀券往旧金山。途中遭德林怯篋、不意券早失去。由聶偵得、
為德林妻妹所竊、查得券於玫瑰花下、始得返趙壁。

とあるから、ニック・カーター物であることは明らかであるし、更に同書目に、

雙環案 美・尼哥拉著 光緒三十四年(1908) 商務印書館訳印

蛇環記 美・尼果拉著 宣統元年(1909) 商務印書館訳印

秘密社会 美・尼古刺著 宣統元年(1909) 商務印書館刊。

などに見えるそれも、愛称の Nick を取らず Nicholas を採つて著者名とした

もので、ニック・カーター物であることは、信じて誤りない。現に、『東方雑誌』六巻二号（宣統元年二月）に見える『雙環案』の広告に、

是書亦尼楷脱偵探案之一。中妓一女子姿容絶美，且襲有絶大之遺産，為奸人所涎，兩次被刦卒喪其生，後經尼輾轉。偵探隻身入賊人巢穴，屢瀕於危，終出陰而獲兇犯。情事離奇，訳筆亦曲折有致。

とある。ニック・カーターは、又、「尼楷脱」とも音写されたのである。以上の他にも、佚名氏の作品中に、ニック・カーター物と覚しきものが、若干ある。とにかく大変な流行である。

正直に言つて、筆者はこれらの作品を、どれ一つ読んでゐない。幸ひ、上に示す様な広告文、乃至は次に掲げる『小説管窺録』の新刊紹介によつて、そのあるものについては僅かながら梗概を知り、原作追究の手懸りを得ることが出来る。例へば『管窺録』には、小説林社発行のその第二冊から第十一冊までの各冊について、

聶格卡脱探案二 本社発行

吳門華子才訳。是書順序之一二，乃冊数，非案数也。与「福爾摩斯探案」標目略異。本冊共兩案：一「雙生案」妓一銀行主女美林出門，方入馬車，即失其踪，遍訪不得。河中忽浮起一女屍，係為人謀斃者，佩飾尽失，乃美林也。聶偵之，惡党已被擒矣，忽全免脱。及案破，乃知死者非美林，為美林之婢。而事实起於美林之妹羅斯。事跡變幻複雜，当以是案為最。一「覬産案」，少女革来姆因弟往学校肄業後失踪，請聶偵察。姐弟係孿生者，於本年將各得遺産二百五十万，其後父串通医生毒革来姆，且棄其弟。医生因巨万財產，欲從而攫之，設種種計劃，卒被偵破，繼父亦自殺，而案遂結。

といった紹介が見えるのであるが、ただこれだけの資料では如何ともならない。勿論、ニック・カーターについての私の知識が乏しいからでもあるが、原作の性格がその追究をいちぢるしく困難ならしめてゐるからである。

そもそも、この探偵を創造したのは、ジョン・コーエル (John Russell Coryell. 1848-1924) といふ男で、ニック・カーターの筆名のもとに、彼が活躍する小説を書いた。それは1884年のことだ (Pierre Boileau et Thomas

Narcejac: “*Le Roman Policier.*” 1964. 寺門泰彦訳あり) とも、1886年だ (コニアツェン『殺人読本』) とも、1889年だ (エライニシ) とも言はれ一致を見ないが、1886年9月18日号の『ザ・ニューヨーク・ウィークリー』に見える「老探偵の弟子」を以て最初の作品とする説が、最も有力らしい。¹²⁾ コーエルの書いたニック・カーターは、変装の名人で、絶えず付け髭や鬘をポケットに忍ばせ、上着を裏返すと見分けのつかない別人になり、貴族から泥棒・老婆と変化自在、機敏な行動力と判断力で悪漢を倒すといふ——要するに、少年の夢を満たした英雄であるに過ぎなかつた。コーエルの後を享けて、フレデリック・ディ (Frederic van Ronssellaer Dey) がニック・カーターの筆名を襲ひ、書きも書いたり千篇以上の作品を世に送つた。それらは、『ニック・カーター・ライブラリー』 (“Nick-Cater Library”) とか『ニック・カーター・ウィークリー』 (“Nick-Carter Weekly”) と題した週刊紙の体裁で、ニュー・ヨークは Street & Smith 商会から売出され、所謂「ダイム・ノベル」——実際には五セントのものもある——流行の先端を切つた。ディは、ニックカーターを「酒も煙草も飲まず、嘘もつたことがない正義の味方」と誇り高い男に仕上げたが、これがアメリカ人気質に受けて、以前にも増して読者の人気を集めることとなつたらしい。流石に彼も最後には疲れ、一篇五十ドル、百ドルの値段で原稿を買ふ始末であつたといふ。かくて、彼の許に集つたフレデリック・デーヴィス (Frederic William Davis), サウエル (E. T. Sawyer), ジェンクス (G. G. Jenks) などによつて書継がれた作品は、1920年頃までに中・長篇合せて千二百冊にも上り、アメリカ国内だけでも三千万部を売上げたといふ。嘗に読書界ばかりではない。かのヴィクトリン・ジャッセ (Victorin Jasset) が、レオン・サージ (Leon Sergy) の小説にヒントを得て脚色演出した『ジゴマ』 (“Zigomar”) が、映画界を席捲するや、やがてニック・カーターが登場して、怪盗ジゴマを相手に手に汗を握る大活躍をする。

更に、これを小説化したものが幾つかあつて、我国でも大谷夏村訳『探偵奇談・ジゴマの再生・ニック・カーター』(春江堂、大正元年九月刊。原作未詳。)

12) William Bridgwater & Seymour Kurtz ed.: “*The Columbia Encyclopedia.*”, 九鬼紫郎『探偵小説百科』, 日影丈吉『名探偵 Who's Who』その他。

といったものが、何冊か出てゐるし、「和製ジゴマ」小説の出現さへ見た。慌てた我が文部省では、青少年の不良化防止のため、ジゴマの名称の使用まで禁止するといふ厳しい措置をとつた程であるし、又ニック・カーターものそのものも、受け容れる基盤に恵まれなかつた所為もあつて、流行は漸く下火となり、さまでの弊害は見なかつたが、アメリカでは、今尚ニック・カーターは民衆のアイドルである。現に、通称キルマスター (Killmaster) によつて息を吹き返したニック・カーターものは、1962年2月の第一作以来既に五十冊近くに達し、売上げ部数も七千万部を超えるといふ。

戦後のそれは暫らく措かう。戦前のニック・カーターものに限つて見ても、これを完全に揃へてゐる図書館はアメリカにもないらしい。エール大学の「バイネッケ文庫」(Beinecke Library) には『ニック・カーター物語』(*Nick Cater Stories*) の第一号から百六十号までを六巻に製本したものがあつたが、何分にも腰の弱い新聞紙様の紙に印刷されたものであるし、百年近くも経つた代物であるだけに、マイクロフィルムに収めることすら困難な保存状態だといふ。又、筆者の手許には、『宿場の惨劇』(“*Nick Cater's Mysterious Case, or The Road-House Tragedy.*”) とか『最大の椿事』(“*The Strangest Case Record, or Nick Cater's Guessing Contest.*”) とか題するものがある。その裏表紙には約二百点のニック・カーターものの書名が挙つてゐるが、この程度の材料では原作の追求は困難である。この種の小説の常として、どれもこれも似たり寄つたりの筋書であるから。——といふ訣で、余程の材料でも出て来ない限り、原作の追究は望めさうにもない。

(4) その他の英・米作家と作品

——ヒューム；ドノバン；デラノイ；

リンチ；ル・キュー；ハウズなど——

筆を本論に戻す。モリスンやボトキン、オルツィ等の紹介について注目されるのは、ファーガス・ヒューム (Fergus Hume. 1859-1932) である。ヒュームの伝については、江戸川乱歩氏の前掲書に要を得た解説があるから、今はそ

れに譲る。スコッチ系の濠洲人で、ニュージーランドに育ち、オタゴ大学(Otago Univ.)で法律を学び、卒業後は弁護士事務所で手伝ひなどしてゐたといふ。二十七歳の折、處女作『二輪馬車の秘密』(“*The Mystery of a Hansom Cab*” 1886)を書き、メルボルンのフレデリック・トリッシュラー社(Frederick Trischler & Co.)から出版したが「史上空前の売れ行き」——その生涯に五十万部を売り尽したといふ。但、原稿は買切りで、僅か五十ポンドに過ぎなかつた——を示したことから、創作で身を立てるべく婦英し、エセックスに居を定めて作家活動に入つた。非常な多作家で、生涯に百三十篇ほどの作品を書いたが、その大半は通俗小説で、探偵小説は四十篇程度である。勿論、それらの作品中には、『蓮つ葉女の眼』(“*The Jade Eye.*” 1903)や『ランディ・コートの怪異』(“*The Mystery of Landy Court.*” 1894)・『一軒宿』(“*The Lone Inn.*” 1903)・『秘密の抜け道』(“*The Secret Passage.*” 1905)の様に、三版も四版も版を重ね、数万部を売り上げた作品もあるが、駄作も尠くなく、『愛の極致』(“*The Best of her Sex.*” 1894)の様に赤本紛ひの題名の作品すらある。いや、あれだけ爆発的な人気を集めた『二輪馬車の秘密』でさへ、今日から見れば、真に歯搔い作品で、ヴァン・ダインは、「この小説は、探偵小説に何も新しい技巧や問題をつけ加へることなく、既にガポリオー、ポアゴベ、グリーン等によつて作り上げられてゐた線を墨守した作風にすぎなかつた。」(江戸川氏引)と評してゐるし、ヘイクラフトに至つては、もつと冷やかに、「聊か解し難いことだが、金儲けの為に書かれたこのまやかし物は、——今日では、もはや何人も顧ることはあるまいが——名だたる奇型品とも言ふべく、僅かに歴史的な関心を誘ふだけに過ぎまい」と酷評してゐる有様である。¹³⁾

では、何故、その様な作品があれだけの成功を収めたのか。勿論、狡猾な書肆の宣伝に乗ぜられた点のあることは否定すべくもないが、もつと根本的な理由が他にあらう。その第一に考へられることは、この小説がオーストラリヤを舞台とし、拙いながらも、そこに住むさまざまな人間模様——植民地成金、そ

13) Howard Haycraft: “*Murder for Pleasure.*”; The Lilly Library (Indiana University) ed: “*The First Hundred Years of Detective Fiction.*” 1841-1941 § 23. etc.

の資産を狙ふ流れ者、貧民窟に喘ぐ女等々——を、描き出してゐることである。もともと、オーストラリアは、イギリスの流刑地として、1787年来開拓された大陸であるが、十九世紀も二十年代に入ると、羊毛並びに食糧供給の主要産地として、本国の経済に重要な役割りを果たす様になる。そこに、1851年から十年間にわたるゴールド・ラッシュの到来である。夥しい本国資本の投入は、単に鉱山の開発に止らず、鉄道(1854)・電信電話、更にしてはメルボルン・本国間(1872年)及びメルボルン・ニュージーランド間(1876年)の海底電線の開設に及び、これに伴つて急激な人口の増加を見る。これらの人々の中には、一攫千金の夢破れて「巡礼自由労働者」となり、各地をさま迷ひ歩く者、都会の貧民窟に息をひそめる者が尠からずあつたが、中には、61年の土地改革に乗じて大地主となり豊かな生活を送る者も、決して尠くなかつた。故国に伝えられるのは、これら成功者の話ばかりである。’80年代に入ると、欧米列強のアジア進出によつて、イギリスの内外に、澎湃としてナショナリズムが起る。’84年のニューギニアの保護領化、ヴィクトリア議会の聯邦制度の採択など、その端的な現はれであるが、かくてオーストラリアを含めた全極東地域への国民的関心は、一層深まつてくる。ヒュームには、他に『中国の壺』(“*The Chinese Jar.*” 1892)・『金の王府?』(“*The Golden Wang-ho.*” 1901)・『大官の扇』(“*The Mandarin’s Fan.*” 1904)・『至尊ミカド』(“*The Mikado Jewel.*” 1910)など、当代のイギリス人のアジア観を窺ふ上で、興味ある作品が幾つかあるが、これらをも併せ考へれば、『二輪馬車の秘密』成功の理由も自づと明らかであらう。謂はば、一種の「異郷趣味」の齎した効果なので、件の書肆が、ロンドンに「ハンサム・キャブ出版会社」(The Hansom Cab Publishing Co.)を起して、一儲けを謀らんだ事実も、これを当込んでのことであるに違ひない。

それから、今一つ。ヒュームの件の作品は、極めて「大衆受けのする文体」で書かれてゐることだ。ガポリオやデュ・ボアゴベイの影響を受けた彼の作品は到る処にあまり重要でない挿話や風景描写などが挿入される。探偵小説としては、無くもがなの記述であるが、文字に飢ゑた植民地の人々は、むしろこれを歓迎したのである。明治の文壇でも、中頃までは「満足に文章が書ける」ことが、作家たることの第一条件であつたが、この場合と事情の一脈通ずるものがあ

る。この場合の名文は、純文学に於ける評価とは違ふ。大衆の心を捉へて放さぬ面白さを備へた文章なのである。『二輪馬車の秘密』には、それがあると思ふ。

それはともかく、この小説の評判は既述の如くであつたから、我が国でもいち早く紹介され、明治二十五(1892)年十一月には、丸素素人訳『鬼車』が金桜堂から上梓されて版を重ねる。更に、昭和期に入つては、坂井三郎(横溝正史の匿名)訳の『二輪馬車の秘密』が『新青年』(昭和三年六月臨時増刊号)を飾り、ついで博文館『世界探偵小説全集』第六巻に収められ、一般にこの訳名で呼ばれることになる。しかも、ヒュームの他の作品の紹介は、我が国では全く行はれなかつたから、「たつた一冊の本だけで探偵小説史に名を連ねてゐる作家」(江戸川氏)といった印象が読書界には強いが、中国ではどうであつたらうか。

華訳されたヒュームの作品には、次の様なものがある。



| | | | | |
|-------|-------|--------|-------|--------------|
| (華訳名) | (原作者) | (訳者) | (発行所) | (刊年) |
| 白巾人二冊 | 英・歇福克 | 商務印書館訳 | 商務 | 光緒三十二年(1906) |

(Fergus Hume: "The Mystery of a Hansom Cab." 1886)

| | | | | |
|-----|-------|----|----|----|
| 二俑案 | 英・許復古 | 同上 | 同上 | 同上 |
|-----|-------|----|----|----|

(Ibid: "The Mystery of the Shadow." 1906)

| | | | | |
|------|----------|----|----|----|
| 劇場奇案 | 英・福爾奇士休姆 | 同上 | 同上 | 同上 |
|------|----------|----|----|----|

(Ibid: "The Fatal Song." 1905)

等しく「商務印書館編訳部訳印」と銘打ちながら、一人の原作者を、かうも書き分ける悠長さには恐縮させられるが、このことは、これらの訳稿が何れも持込みの原稿であつたらうことを、暗示する。

さて、“The Mystery of a Hansom Cab.”を移して、華訳が『白巾人』と題するのは、後篇第六章(華訳第二十八節「索詐」)で、ホワイト氏殺害の真犯人ロージャー・モアーランドがフレトルビー邸を訪れ、彼の過去の秘密につけ

込んで五千ポンドを強請つて帰る所を、娘のマッジや恋人のブライアンに見られてしまふ。彼は、『この暑さにも拘らず、白い絹のネッカー・チーフに顔を埋めてゐた』とある条りに拠るものであらう。一寸、その辺を抜出して置く。

正要說話，忽聽見報客鐘響。又聽見傭人脚步声，以乎領了一箇人上樓到仏馬克書房裏去。歇了一會兒，那傭人進來点燈。仏得皮小姐問他，來的是什麼人。傭人答道，我不認得。他說有事專誠來見我室主人，所以我領他去的。仏得皮小姐道，我想父親曾經說過，不要有客來擾。傭人道，但是這位先生說是同他約好的。仏得皮小姐道，我父親正厭煩，偏有這些事情來煩他。說了便彈起琴來，唱著法國曲子。費子琦就臥在榻上聽。一箇彈唱的得意，一箇聽得出神。忽然仏得皮小姐憂然中止，便也不管費子琦了，奔出房去，疾忙上樓。這是什麼緣故呢。因為聽見極響的叫喊声音，從他父親書房裏出來。又記得欽司登從前說的說話，說他父親不可受驚，所以奔了去。仏得皮小姐奔上了樓，到了書房門口。將門敲上兩声，卻是鎖的。只聽見他父親在裏頭急急的問道，是誰。仏得皮小姐道，是我。我恐怕你。說到這裏，卻停住了。仏馬克在房裏急忙說道，我沒什麼事，你快下樓去罷。我就出來了。仏得皮小姐只得下樓。到了起坐間相近，但見費子琦立在門口，面上十分惦記。便問道，什麼事。仏得皮小姐道，我聽見父親在房內叫喊。恐怕有什麼驚動，否則必不如此。現在我去問過他。他說沒什麼，所以就下樓來。又把欽司登說的病情告訴了費子琦。費子琦聽了，也是驚憂。兩箇人便走出屋出，遠遠的在樹陰下坐了談天。只見正厅的門開在那裏，燈光明亮，看得極清。約有一刻工夫，仏得皮小姐的驚恐也定了。兩箇人正講著閒話，忽見正厅上出來一箇人，走到門邊立定了。穿一身時式衣服，當夜雖熱，頭頸裏倒圍了白色網巾。費子琦便道，這箇人真是怕冷呢，倒也奇怪得很，但見那人將帽子脫下，回頭朝厅上望。那厅上的燈光，射在他臉上，照得清清楚楚。費子琦跺脚道，喚慕萊，那箇人聽了，連忙四下裏尋人。戴上帽子，急急的飛跑而去。但聽見門一響，便不見了。仏得皮小姐在月光下，忽見費子琦面容失色，不覺一驚，便道，慕萊是什麼人。忽然悟道，我記得了，是滑忘的朋友。費子琦，輕輕的答道正是，就是大審時的一箇見證人。

（第二十八節 「索詐」）

華訳が、此時代には珍しい白話訳であることは注目してよい。勿論、周密体の訳ではなく、かなり原文の刪節が行はれてゐる個所がある。その為、「文章で読ませる」原作の味が薄れた面はあるが、改作の筆を弄した様な個所はない。又、白話訳といつても、「文学革命」以後のものに較べると、古色蒼然たる観がないでもないが、この場合、却つてヒュームの作品の味を活かすに役立つてゐる。まづ、上の部に属する翻訳と言つてよい。丸亭訳との比照はまだ試みる機会がないが、華訳は直接英文から訳したものであらう。『説部叢書第四集第六編（初集本第三十六編）』として収める他、『小本小説』にも収められてゐるから、かなり好評であつたに違ひない。

『二俑案』は、「達納耳者、一顧影少年也。既美麗、家復康実、歳可得英金五百鎊。性沈敏、暇則鉛槧不去手、而独專志於稗官云々」といふ冒頭の一節を読めば気附かれる様に、『影の秘密』(“*The Mystery of the Shadow.*”)を訳したものである。『影の秘密』は、『二輪馬車の秘密』に次ぐヒュームの代表作とされるが、博識を以て知られた江戸川氏も遂に読まれる機会がなかつたらしい。古書目録に1907年版の出でゐるのを発見されて、「ヒュームに、さういふ作があることは、間違ひないやうである」とされるに止まつたが、これは再版のオムニ版で、初版は同じくキャッセル社(Cassell & Co., London)から出た1906年版がそれである。本文279ページ(再版本は132ページ)、スミス(A. T. Smith.)の挿絵十六葉がある赤クロス表紙の本である。物語は——ある日、突然男女二人の殺人事件が至近距離で別個に起る。男のズボンにはJGの頭文字が入つてゐるが、勿論身許は審らかでない。奇妙なことには、女のポケットの中に、六寸ばかりの藍色に光り輝く古色ゆかしい土偶があつたこと、又男の死骸の傍にも同じ様な土偶が落ちてゐて、この二つの事件は関係があることが訣る。「影の少年」と探偵の努力によつて、二人はペルーの愛国黨員で、殺される直前に暗殺の予告を受け、件の土偶を送りつけられてゐたことなどが判明するが、犯人は杳として判明しない。が、遂に入手した秘密文書から、次第に謎が解けて行くといふ筋。勿論、本格派の作品ではなく、冒険探偵小説に類するものだが、土俗的な興味も手伝つて一寸面白い。ペルーは、1821年に一応独立の榮譽を勝ち取るが、スペインの承認を得るまでには、'63年から二年に亙る

戦争を経験せねばならなかつた。その間にも、ボリビアとの紛争は絶え間がなかつたし、'79年には、チリ・ボリビア戦争に捲き込まれ、南部のタクナ及びアリーカ地区を失つてしまふ。両地区の帰属が解決するのは、1929年のことだが、この半世紀の間ペルーの甜めた辛酸は筆舌に尽し難く、秘密結社の活動も盛んであつた。『影の秘密』はさうした史実を織込んだ小説であるが、実際に結社の内面が描かれてゐる訣ではないから、際物的な色彩が強い。

華訳は全二十六章、文言ではあるが、平易で決り易い。例文として、影の少年が学友パドリオを博物館に訪ね、件の陶偶の鑑定を乞ふ一節を掲げよう。

達納耳少巴得竜五年、軒軒有氣概、巴得竜甫三十、已現衰状。蓋幼於学、瘁心所致。達納耳旋出陶偶曰、請君觀此埃及陶偶、以故実告我。語竟、自就坐。巴得竜注視久之曰、君誤矣。此非埃及物。達納耳曰、我知埃及国俗、人死、漬以塩、暴使為腊。此偶即状其死者像。巴得竜曰、非也。昔秘魯人亦尚保尸法。此偶定為秘魯国物。達納耳甚訝曰、胡由知之。曰不見此偶胸前著日乎。秘魯人崇事太陽、故此偶以日置胸前。蓋出諸英戒 当國西班牙前其民称王曰英戒今則秘魯自主国矣 墓中。厥名曰俑。達納耳曰、俑何所取。巴得竜曰、当时秘魯頗似亚洲国、以野蛮法使生人殉葬於貴者墓中、配司加書中載其事。一英戒死、凡宦官宮妾殉者、多至千人、有時代以俑。語次、指陶偶曰、此俑則代人者。故每一英戒死、作俑必如其僕妾数、堯一墓則俑纍纍且数百、說稿有可証。達納耳納俑入懷曰、君言博瞻、惜未能助余毫末。巴得竜曰、余未解君言。此俑得自何所。達納耳曰、自一被殺之女衣中得之。巴得竜驚曰、奇哉。女何事遭殺、又何以懷此秘魯之俑。達納耳曰、君所問者、即余欲問之詞。巴得竜曰、脱余能助君。言未竟、達納耳止之曰、恐君亦無能為力。遂辞而出。巴得竜乃溺苦於学者、即迴身復入書窟矣。 (第四章)

最後に、『劇場奇案』であるが、筆者がその原作として『死を招く歌』(“The Fetal Song”)に見当をつけてゐるのは、卷末近くでの主人公賈斯礼と那克羅夫人との会話中に、「夫人曰、吾未嘗殺彼。賈曰、爾雖未殺彼、爾實教之歌以致之死、与殺彼同。夫人曰、否；彼自愛此歌、故令吾教之。吾初未嘗強彼学之也云々」といふ一節があるからである。物語の筋は、——モンテカルロからロンドンに帰任した新聞記者賈斯礼は、本社の主筆から愛特門公爵夫人那克羅の失

踪事件の探査を命ぜられる。今でこそ往来は絶えてゐるが、実は愛特門公爵は賈斯礼の伯父であるから、那克羅夫人とも無縁ではない。止むなく受諾した彼は、早速内偵にかかるが、何時の間にか事件の渦中に捲き込まれてしまふ。事件の蔭には、財産相続の問題が複雑に絡んでゐるらしく、続発する椿事に、賈斯礼は翻弄される。以下、華訳の例文として、夫人の足跡を尋ねて某の海浜に赴いた賈斯礼が、旧友霍来斯と偶然に会ひ、共に観劇に赴く一節を掲げて置く。蓋し、華訳の題名は、この一節に基くものであらう。

賈笑曰、爾固常休息者、爾既無事、今夕胡不同游。霍曰、此地殊無足清游、僅有謳者在此。彼中有頤而長之女子、法国歌尚佳。盍往聽之。賈突聞法国歌一語、斗触那克羅夫人固善法国歌者、心大動、遂偕往舞台下。見台上懸明燈、係支那所製、精巧絕倫。台右設八音琴、左立伶人五、三女二男面覆白網。一伶起按八音琴、一伶手撫月琴、声琤瓏悅耳。伶皆服寬博衣、冠銳冠。燈光下視之、頗奇特。万衆視線、悉注台上、一男子方引吭而歌、為阿力斯安在之曲。歌未已、忽無台上一撫月琴者、注視賈。賈以為彼望己身後之友人也。顧視無人、乃知彼實望己。須臾復顧視、則彼已不復望矣。既而一女伶出、欲賡歌。男子拳法国語呼曰、朋來書声歌。賈頓悟曰、此姪氏所善歌也。女子一发声、高下中節、宛如其姪。蓋賈固聞之審矣。既一闋、如夢如醉、幾不能自解、愈信其為那克羅夫人無疑。思彼以公爵夫人之地位、甘為女伶賤伎、在此献藝、誠屬何心二闋。賈不復能忍、欲躍上台中、質問夫人、胡為背夫至此。正排衆欲前、忽一人服白法蘭絨衣、与賈相似、持刀疾躍上台、逕趨謳者、猛力以刺。謳者仆、其人躍下、疾奔至賈旁、匿入人叢。衆皆驚愕、不能解、目瞪口呆。賈忽趨前挾被刺者起、血流被胸、尸体已僵。賈急去其網、視其面、大驚。蓋被刺者非姪、乃一少女、即曩日杜聞園所見者也。賈認其側、俯首諦視。斯時衆男子俱大呼、婦女則駭而遁走、事機極速、不待賈知覺。已有人手拍肩、力挈其頷矣。忽聞一醉人之声、巨如剖竹。自衆人中出者、呼曰、捕殺人賊、捕殺人賊。賈急奪其人之手、大呼曰、吾非殺人者、何逼吾為。忽一謳者出曰、吾親見爾手殺人。尚狡類耶。賈不服。謳者徐去其面網。賈視其容、大驚退走。蓋儼然一那克羅夫人也。賈又大呼。

(第二章)

因みに、この『劇場奇案』は、商務版『説部叢書』初集第二編に収める。原
版の第一集第二編は、雨塵子（周達）訳『経国美談』であつたが、故あつて之
を削り本書と差換へたのである。その間の事情は、別稿「商務版『説部叢書』
について」に述べて置いた。

ヒュームについて注目されるのは、ディック・ドノバンである。彼の作品で、
華訳されたものには、

| | | | | |
|---|---------|----------|-------|---------------------|
| (華訳名) | (原作者) | (訳者) | (発行所) | (刊年) |
| 多那文包探案 | 英・狄克多那文 | 商務印書館編訳所 | 商務 | 光緒三十三年十二月 (1907) |
| (Dick Donovan: “ <i>From Clue to Capture.</i> ” 1898) | | | | |

がある。商務版『説部叢書』第八集第六編（初集本第七十六編）として上梓さ
れた他、『小本小説』にも収められて流布した。

ディック・ドノバン、本名はジョイス・エマーソン・プレストン・マドック
(Joyce Emmerson Preston Muddock, 1848-?) は、ジャーナリスト出身の
作家で、『チェンバースズ・ジャーナル』(“*Chambers's JI.*”)・『イヴニング・
ニューズ』(“*Evening News.*”)・『デイリー・メール』(“*Dly. Mail.*”)等の
記者をしたり、『蕃からクラブ紙』(“*The Savage Club Papers.*”)・『紳士雜
誌』(“*Gentleman's Mag.*”)・『ストランド誌』・『ピアソン誌』等の編輯に従
事したりする傍ら、旅行案内書や小説を書いた。小説の数も、八十篇近くはあ
るから、大変な精力家である。¹⁴⁾

探偵小説と言つても、彼はドイル以前の作家であるから、その作品も「捕り
物帖」式な旧套を脱しないものが多い。その題名を見ても、初期の作品には、
『最後の捕り物』(“*Caught at Last.*”)・『男漁り』(“*The Man-hunter.*”
1889)・『マンチェスターから来た男』(“*The Man from Manchester.*” 1890)
の様に、ダイム・ノベル式なものが多い。これが、後年の作品になると、ドイ
ルあたりの影響を受けたのであらうか、『ジャマイカ・テラスの怪』(“*The
Mystery of Jamaica Terrace.*”! 1895)・『ロシア秘密警察ミカエル・ダーネヴ

14) ‘*Who's Who in Literature,*’ 1927. p. 324.

ィッチの事件簿』(“*The Chronicles of Micael Danevitch of the Russian Secret Police.*” 1897)・『タイラー・タートロック氏の冒険』(“*The Adventure of Tyler Tatlock.*”)の様に、題名も内容も幾分かスマートなものに変わり、探偵小説らしくなつて来るが、それもとりたてて論ふ程のものではない。要するに、彼の作品は、歴史的な過去の存在以上には出るものではない。¹⁵⁾ 因みに

“*Who's Who in Literature.*” 1927年版によると、
「彼の作品は、歐洲大陸諸国・インド・日本等で翻訳された」とあるが、邦訳された作品は何か、管見の限りでは明らかでない。

『多那文包探案』は、原書中の「幽霊屋敷の秘密」(“*The Secrets of a Haunted House.*”)を省き、次の十一篇を訳出したもので、作品の配列には若干の手が加へられてゐる。以下、これを表示すると、次の如くである。各項の末に第何話と記すのは、原本の配列である。



| | | |
|------|---|------|
| 猫眼石 | The Story of the Great Cat's-eyes. | 第5話 |
| 髑髏飲器 | The Jewelled Skull. | 第3話 |
| 兄弟会 | The Secrets of the Black Brotherhood. | 第7話 |
| 銀七首 | The Silver Dagger. | 第6話 |
| 隔簾影 | The Chamber of Shadows. | 第1話 |
| 花中蠹 | The Worm in the Bud. | 第4話 |
| 考林社 | The Story of an Infamous Cabal, and How it was detected. | 第9話 |
| 劇場彈 | An Unrehearsed Tragedy. | 第10話 |
| 機器炉 | Checkmated. | 第8話 |
| 瘢手印 | The Clue of the Handprint. | 第12話 |
| 慘愛情 | The Mislplaced Love. | 第2話 |

15) Ellery Queen: “*Queen's Quorum.*” pp. 27-28.

訳文は、

伯爵米得維者，雄於財。性癖嗜珍異物，有殊絕者，輒百計思購得之。擲多金不吝。所庋藏珠璣瑤玉，及陳翫物之巧作詭製。既駢比富積，冠魁一世矣。而伯爵心猶騷然病其未足，欲得一貓眼巨寶石，補所未具，而終以未能即獲一稱意者，引為大恨。蓋此石產印度錫蘭島，其美者精湛瑩麗，舉無與比。第至艱罕，未易得。肆所沽，多璣細有瑕疵，間有完善，亦未能特出。米氏熾心是物，物色有年，於各國搜羅殆徧，迄不得一慰渴願。最後錫蘭島，發見一石，大若雞卵，異光煜煜，表裏洞明，晴若秋水清澄，瀲艷欲活，全体無纖毫缺憾，說者謂未施槌琢，已可值英金五萬鎊矣。

当此物一出，凡有力者，皆欲収之入掌握中，而卒為伯爵所有，以其不靳巨値，衆莫與之競爭。蓋其專使赴錫蘭購取也，瀕行，命之曰，必得此石不問値。越四閱月而此石至英。 (貓眼石)

といった調子のもので、ただ筋を綴る程度の甚だ粗い大意識であるが、一節一節、行を改めてみるのが珍らしい。

ドノバンの小説と並んで訳出せられたものに、デラノイ (H. Burford Delannoy.) の作品がある。

| (華 訳 名) | (原 著 者) | (訳 者) | (発行所) | (刊 年) |
|--|----------|--------|-------|--------------------|
| 鉄 錨 手 | 英・般福德命納著 | 商務印書館訳 | 商務 | 光緒三十二年九月 (1906) |
| (H. Burford Delannoy: "The Margate Murder Mystery." 1902?) | | | | |
| 一万九千鎊 | 英・般福德命納著 | 商務印書館訳 | 商務 | 光緒三十三年八月 (1907) |
| (Ibid: "Nineteen Thousand Pounds." 1901) | | | | |

がそれで、前者は商務版『説部叢書』第六集第五編(初集本第五十五編)として、後者は同じく第八集第七編(初集本第七十七編)として、上梓された。

デラノイについても、筆者の知識は極めて乏しい。『二十世紀著述家辞典』(Kunitz & Haycraft ed.: *Twentieth Century Author*. 1942)を繙いても、彼の名は見出すことが出来ないから、その作家的地位も推して知るべきだが、前世紀末から今世紀初頭にかけて、少しばかり活躍した作家である。作品としては、『喜劇役者のクリスマス晩餐』("The Comedian's Christmas Dinner, and other short theatrical stories." 1897)・『自転車乗り失踪事件』("The

Missing Cyclist, and other stories.” 1898)・『線と線との間』(“*Between the Lines.*” 1901)・『死人の部屋』(“*Dead Man's Rooms, A story of Gray's Inn.*” 1905) など、探偵小説を主体に約二十篇ほどがある。

『鉄鎗手』は、『小説閒評』に、

是書凡四十二章，所敘命案重疊。凶手醫師馬互^(互)，毒殺情婦雷亞勝之妻，復扼殺雷亞勝，屍為人竊去，遇救得未死。復用毒氣殺青衛而解其屍，又閉死看護婦曼娘。其他殺機時起。欲殺雷萱郎，而凶全得產業，欲殺高偵探以滅口，幸皆無隙可乘，未遭毒手。至於李佐治之自戕，長海雷之癡斃，雖不関馬事，而仍与案情牽連。一波未平，一波又起，後經高偵探查獲証拠，案遂破。高偵探謂自古命案，皆因財色而起，誠哉是言。惟凶狠如馬互^(互)，實為世界所僅見。無時不起殺心，即無時不欲逞毒手。總之不外一「貪」字，「色」字一関尚在其次。甚矣，利之害人也，如是如是。

とあるから、記憶に留めてゐる人も尠くないであらう。その原書については、未だ比照する機を得ないが、私は『マルゲート殺人事件』(“*The Margate Murder Mystery.*” 1902)ではないかと、想像してゐる。蓋し、物語中の醫師「馬互」は Margate の音訳と見られるからである。又、華訳の奥附には「商務印書館編訳所訳印」とあるが、これ亦売込み原稿なるべく、訳者は留日学生か留日学生上りの人物であつたらう。訳文は、いささか雅致に闕ける憾みがあるが、その反面、晦渋ならず、平凡に墮ちずといつた長所もあり、まづまづの翻訳と言つてよい。殊に注目されるのは、文中に「!」・「?」などの符号や、会話を示す「 」といつた記号が、頻用されてゐることである。以下、訳文の一端を示し、翻訳文体が一步一步出来上りつつある跡を、窺ふとしよう。

……「卿妄言耳」言者為一少年。面色蒼白如死灰。倚戸側足而立，一手持鑰作欲啓戸狀。其人業醫，馬姓，互名，小字礼佳。時一婦聲曰，「否，否。妾何曾妄言者」。言訖作乾笑。婦長身玉立。風致娟好。衣灰色，領袖俱白。一望而知為看護婦也。少須，婦指馬互而詈曰「惡賊！殺人賊！」馬互顛聲曰，「卿妄言耳」。婦冷笑曰，「君惟能言此四字耳。謀殺樓上之婦人者，非君也耶？君目妾為賊耶？當君潛入彼室時，妾假寐以窺之。厥後注炭強水^{酸質之}於婦口者，非君也耶？納強水瓶於婦手者，非亦君也耶？」。馬

互曰、「渠已死！」。婦曰「胡陽託不知為哉？ 殺之者實即君耳。君既殺之，復以瓶置其手，俾人見之，信為自裁。君須知今日之妾，不似一載前之愚蠢，易為人播弄矣」。馬互曰，「卿將何求？」。婦曰，「君固雷亟勝愛妻之情人也。適雷其婦死，戚甚，已返寢室，雷君誠篤人也。前此從未嘗一疑及其不貞之婦。其婦因亦心感之，欲於未死之前自承。君百計阻之不克，乃說計殺之。殺之以毒藥」。

（第一章）

『一万九千鎊』は、大金の紛失と殺人事件とが絡みあつて、意外な方向に発展して行くといった趣向の作品であるが、これ亦原書と比照する機会を得ない。蓋し、デラノイの作品で再版されたことがあるのは、僅か二点あるに過ぎないし、「傑作選」などに収録される程の作品も残してゐないからである。訳文は、

羅律師之去其弁事所也，足顛身震，既不能歩。風声車声，皆以為躡其後之警察。每見警察，即瞻戰心驚，怖懼欲死。

忽憶唐言三日之内必無拘之者，懼心漸消。但慾心乘懼心之消而入。不一刻間，驚懼全忘，而慾心已大熾。念彼一万九千鎊者，常置於心而竟不能得，乃為紐約偵探所有，心殊不甘。

当唐極樂誑之吐実時，其神情實似偵探。故律師心中，但知唐即偵探，既聞其索函与英倫銀行。遂信其必已獲金，而唐所云須三日後，拘羅之偵探方至。羅亦深信不疑，決欲於三日內逸去。但身無長物，旅資何出。即能幸逃法網，終至窘苦以死，豈得計哉。且殺人舟中，為欲得一万九千鎊也。其後不知金之所在，無自設策。今已知矣。豈可不一試再試，以期必得哉。遂決欲計誑偵探而攫其所有。

（第二十四章 「設計」）

といった調子のもので、文章の呼吸が、何処となく泥臭い。矢張り留学生あたりの手に成るものであらうか。

デラノイについて語つた序に、

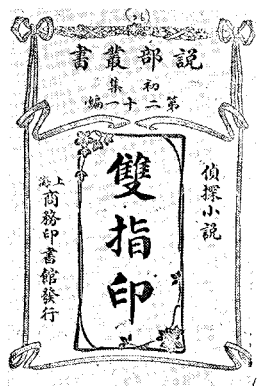
（華訳名） （原作者） （訳者） （発行所） （刊年）

雙指印 [英・培福台蘭拿] 著 商務印書館訳印 商務 光緒三十一年六月
(1905)

に一寸触れて置きたい。この小説は、もと『東方雜誌』の二巻一号から五号（自

光緒三十一年二月至同六月)までに連載され、同年六月に単行上梓され、後商務版『説部叢書』第三集第一編(初集本第二十一編)に収められ、更に『小本小説』にも収められたものである。阿英氏の書目には、これを別訳の如く扱ひ重出させてゐるが、他の例に倣つて一項目中に整理すべきである。

ところで、この小説の原作者については、『説部叢書』本では奥付にその記載がなく、誰とも判明しない。従つて、阿英氏の書目にも、これを逸してゐ



るが、『東方雜誌』掲載の方には、「英・培福台蘭拿著」とある。これを何と訓むか。「般福德命納」と同列に置いて、H. Burford Delannoy の音訳と見ることも不可能ではなささうであるが、未だその自信はない。蓋し、『雙指印』の原書に適はしい様な題名の作品を、彼の創作リストの中に見出せないからである。

それはともかく、この小説が筆者の関心を誘ふのは、これが立派な指紋小説であるからである。——英京ロンドンのとある百貨店の婦人服売場で働く娘路山が、一日何者かに扼殺される。警察は間もなく容疑者として惠廉を逮捕し投獄する。惠廉には宝蘭といふ恋人があり、二人は結婚を夢見てゐるが、夢は悉く破壊されてしまふ。ふとした機縁で宝蘭を知り、その訴へを聴いた小説家の頼華は、惠廉が冤罪で獄中に伸吟してゐることを確信する。彼は、惠廉や宝蘭の周辺の人々から事情を聞き、真相を究めようと調べ歩く裡に、その妻も何者かに斬殺され、事件の背後に大きな闇の力が働いてゐることが、次第に明らかになる。彼は嘗て警察に勤めたこともある約翰生の力を借りて、猶も犯人を追求し、遂に捕へるのに成功する。極め手となつたのは、犯人の指紋であつた。

至是約始知已有警員守此。度彼或預知盜至，而狙伺之，而盜已為予得，乃復力持之。即啓扇，二人入。非警察裝。約復疑盜党，即左持盜項，右手槍欲發。忽戶外有牛眼燈者，問曰，爾何人耶。約曰，余亦欲詰爾，余所為悉遵法律。賊已受執，汝曹復欲破戶，何故。曰，余警察員也。起外服以隱記示之。約曰，然則汝曹以捕此賊來乎。曰，此非賊，乃与我共事者。約駭

絶。彼又曰、釈君手、吾任其無他。約曰、吾在倫敦職警察、歴二十一年。無論其為主捕従捕、未見所為有若此者。言次、前二人入圃、僅手燈者語約曰、若輩並与偵事、日夜守此宅者、已三日。蓋室中有重係、樓以下各屬悉扃、不得入。故令一人梯入其樓之後牖、啓前扉。使我曹可進而從事。約曰、余固知君輩所欲得之兇徒、必在其中、無疑義。手燈者聞言、目燦燦祝約。約曰、君盍与二人守圃。即向室隅取燈。燭前所持者、非他人、探長撥際耳。約遂啓前室門、中寂然、相与偕入。約曰、今日余得此主室者之書。撥曰、其頼華耶。曰然、且附鑰二、謂已繫兇徒舍中、於二年前提監脱案。語未畢、撥驚問曰、麦監脱案乎。君誤矣。此兇乃斃頼華婦者、三日前入此。君以為即頼華所云麦監脱案犯乎。約曰否、彼僅言兇徒耳。曰、予尾此兇、数星期矣。彼法人也。約曰、法人耶。若是則案益頭。曰、吾窺之夙。吾以謂撥曰、已得其血中之鞣印、及指掌。約亦探囊出指印、乃得自法主獄所者。摄影法、符否。撥用鏡展較之曰、悉類、無毫末差。約撫掌曰、不意吾兩人所踪跡者、竟同為是人、既爾、吾曹速覓之。(第十一章「約翰生捕犯事」)

この少し前の所で、犯人が跛行者であることを推測する条りに、カーボン紙で容疑者の靴底を型取りすることが記され、次いで、コップに残された指紋を採取することが語られてゐる(第十章「撥際偵察事」)が、具体的な方法については書かれてゐない。

ところで、指紋小説と言へば、まづ我々の脳裡に浮ぶのは、フリーマンの『赤い拇指紋』(Austin Freeman: “*The Red Thumb Mark.*” 1907)である。が、これより七年も早く出版されたヘルバート・キャデットの『ある新聞記者の冒険』(Herbert Cadett: “*The Adventures of a Journalist.*” 1900)の冒頭の短篇「指紋の手掛り」(“*The Clue of the Finger-Prints.*”)が、「指紋による犯人の個人鑑別を描いた最も早い作品の一つ」であることをクィーンは指摘し、¹⁶⁾更に忘れてはならないものに、マーク・トウェンの『ミシシッピー河の生活』(Mark Twain: “*Life on the Mississipi.*”)の第三十一章の一篇と長篇『抜けウィルソン』(“*The Tragedy of pudd'nhead Wilson.*” 1894)が

16) Ellery Queen: “*Queen's Quorum.*” pp, 44-45.

あると説く。これを受けて、江戸川乱歩氏は、明治二十五(1892)年六月、講談落語雑誌『東錦』第三号に、英人ブラック(後述)口演・石原明倫速記として掲げられた『岩出銀行血染の手形』(同年十二月、今村次郎速記に改め、『幻燈』と改題して、三友舎より単行上梓)が、矢張り指紋小説であり、マーク・トゥエンの『抜けウィルソン』より二年も早い作品であることを力説して居られる。¹⁷⁾ 勿論、ブラックの小説は、イギリス小説あたりから筋を借用したものであらうことは、江戸川氏も示唆せられる通りであるが、今はそれを追究すべくもない。翻つて、『雙指印』は、光緒三十一(1905)年に上梓されてゐるのであるから、原書が出版されたのは、少なくともその前年でなければならぬ。仮に、1904年のこととしても、それは上記キャディットの小説に遅れること、僅かに四年のことである。イギリスで、今日世界の多くの国々が用ゐてゐるヘンリー式指紋分類法が採用されたのは1901年のこと、指紋研究はまだ草創の域を脱してゐなかつた。上記ドノバンの『癡手印』は、素材的には斬新な作品であつたと見られるが、これは指紋(Finger-Print)ではなく手形(Handprint)が極め手となるのであるし、『ノーウッドの建築師』で偽指紋を犯行に用ゐさせたドイルでさへ、『アベ・グランジの惨劇』では之を利用する発想を得ず、「指紋鑑識について何も知らない」(江戸川氏)様な趣きを示してゐる。これを以てこれを見れば『雙指印』の新しさは、改めて見直す必要がある。

とまれ、この小説は、指紋小説として珍らしいばかりでなく、その構成法が又珍らしいのである。「第一章 麦監脱案之縁起」・「第二章 宝蘭自述」・「第三章 約翰生述」・「第四章 頼華述」・「第五章 反格里末述」といふ様に、事件関係者の回想や供述を積み重ねながら、作品を構成して行くが、当代に華訳された小説で、この様な手法を以て綴られた作品は、他にあることを知らぬ。かう見て来ると、『雙指印』の清末探偵小説史上に占める位置は、極めて重要なものになる。

因みに、阿英氏の書目によると、『雙指印』と前後して、尚三つの指紋小説が華訳されてゐる。すなはち、

17) 江戸川乱歩「明治の指紋小説」(『続・幻影城』、全集巻15所収)。

| (華 訳 名) | (原作者・訳者) | (発行所) | (刊 年) |
|---------|-------------|---------------|---------------------|
| 血 手 印 | 茂原周輔訳・陶懋立重訳 | 文 明 書 局 | 光 緒 三 十 年 (1904) |
| 血 手 痕 | 英・布拉克著・笑我生訳 | 『江西』掲載 | 光緒三十二年 (1906) |
| 血 指 印 | [佚 名]・田 鑄 訳 | 香 港・中 国 小 説 社 | 宣 統 一 年 (1909) |

である。何れも未見の為、大胆な推測に過ぎないが、田鑄訳『血指印』は、或いは上記フリーマンの『赤い拇指紋』であらうか。英人布拉克のそれは、疑ひもなくブラックの『岩出銀行血染の手形』(後述)で、明治三十五(1902)年十二月、浅草の弘文館から再び原題に復して再刊されたものが底本となつたに相違ない。残る『血手印』であるが、これは茂原訳も見てみないので、原本が何であるか、全く知るところがない。しかし、これが重訳されたのは、『雙指印』より一年も早いことは、これ亦注目に値しよう。

デラノイと並んで、ローレンス・リンチ (Lawrence Lynch.) の作品が、紹介されてゐる。リンチも亦我国では余り馴染みのない作家であるが、イギリスでは最も大衆的な女流作家として、当代に知られた存在であつた。1880年代の初め、ロンドンのワード、ロック、アンド・ラウトレッジ社 (Ward, Lock & Routledge & Co.) から、「六ペンス文庫」とも名付くべき廉価本が多数出版されたことがあるが、彼女の小説の大半は、このオムニ版の形で出た。彼女は、本名エンマ・マードッチ (Emma M. Murdoch.)、結婚後はヴァン・デベンター夫人 (Mrs. E. M. M. van Deventer) の名で親しまれる。彼女は、決して多作家ではなかつた。作品の数も、長・短合せて二十篇余りであらうが、創作の筆は未婚時代から執つてゐた。当初はリンチの筆名を用ゐたが、やがて本名をも併用し始め、結婚後も筆を絶たなかつた。作家としての彼女は、比較的恵まれた道を歩んだ。処女作『三人の影』(“*Shadowed by Three*.” 1884) でその手腕を認められた彼女は、一躍文壇の寵児となり、翌 '85年にはシカゴのアレックス・T・ロイド社 (Alex T. Loyd & Co.) から、『危険な地盤』(“*Dangerous Ground, or the Rival Detective*.” 1885) を出版する。これは大探偵ヴァン・ヴァーネット (Van Vernet) とリチャード・スタンホープ (Richard Stanhope) の対決物語で、緑色の美しいクロス本だが、別にサムナー社 (H.

A. Sumner & Co.) の挿画入り本もある。かくて彼女は、アンナ・カサリン・グリーン (Anna Katharine Green. 1846-1935) に次ぐ女流探偵小説家として迎へられ、アメリカの探偵小説史上にも、その名を留めることとなつた。華訳された彼女の作品には、

| | | | | |
|---------|----------|---------|---------|--------------------|
| (華 訳 名) | (原 作 者) | (華 訳 者) | (発 行 所) | (刊 年) |
| 三 人 影 | 美・楽林司朗治著 | 商務印書館訳 | 商務 | 光緒三十四年一月 (1908) |

(Lawrence Lynch: "Shadowed by Three." 1884)

がある。商務版『説部叢書』第十集第三編 (初集本第九十三編) として印行されたものの他、『小本小説』にも取められた。物語は、ロンドンで起つた猶太人富豪兄妹の殺害事件、一富豪の遺産相続に絡む詐取事件、シカゴで起つた夫殺しを、それぞれ三人の探偵が調べる裡に、事件が一本に絞られ、互に協力して犯人を追跡するといふ筋。舞台が欧洲と米大陸とに跨つてゐるだけに規模が大きく、波瀾に富んだ読み物となつてゐるが、登場する探偵は、未だ旧式探偵の埒外に出るものではない憾みがある。華訳は、勿論周密体のもではないが、まづまづの出来と言つてよい。



俄而門陡闢，銃聲一發，窗櫺皆震動。李娜拉手中藥瓶，驟被擊落。狼藉滿地，郊生驚倒臥牆隅。手中銃墜地，一手猶緊握利刀。突有一婦立於二人之間，左右持短銃，指郊生之胸。婦非他，即所謂女偵探啞利而夫人是也。指郊生疾喝曰，無賴狗，伏彼勿動。少動，銃彈將直貫汝身。又轉向李娜拉曰，速取地上短銃，毋為彼所得。李從之，持槍向郊生而立。郊生是時以一臂撐地，拳首怒吼曰誰！汝何人，敢闖入人之內室。曰，吾特來救此可憐之女郎。郊生驚稍定。覺其音甚熟。審之，始知即彼所信任之女偵探也。遂低首不語。悔恨莫及。啞利而曰，吾隨汝偵探已久。凡爾所為，吾已盡悉，吾將拯此女郎去，速棄手中之利刀。咄，爾不願乎。李娜拉其來助吾。李娜拉應聲而前。女偵探忽變男子音，問曰，爾能免彈命中乎。李曰，雖非所善，尚不致空擊無準。爾不見吾之腕力乎。曰，然則請拔機指定彼額，吾將往奪其

手中之利刃、而縛其手足。苟彼稍稍抵拒者、爾立擊之可也。……

(第三十七章)

この辺りで、少々気分を変へよう。

既述オープンハイムと並んで——といふよりは、むしろこの分野を開拓した人として、スパイ小説・暴露小説に得意の筆を振つたのは、ウィリアム・ル・キュー (William Tufnell Le Queux. 1864-1927) であらう。表向きにはジャーナリストで、実際にイギリスの秘密牒報員であつた彼は、観光に名を借りて、欧洲全土は勿論、当時「欧洲の火薬庫」と目されてゐたバルカン半島の国々——セルヴィア・アルバニアからトルコ地方にも足跡を印し、その政情や欧洲各国の秘密牒報機関の内幕にも通じてゐた。彼が屢々欧洲各国の外交顧問に委嘱され、セルヴィア・イタリー・メキシコ等から勲章を授与されてゐる事實は、その存在が並々のものではなかつたことを物語つてゐる。『やましい同盟』 (“Guilty Bonds.” 1890) 以下、作品はすこぶる多く、優に百篇を超すが、質的にもクーパー流の「スパイ小説」(J. Fenimore Cooper: “The Spy.” 1821) あたりに低迷してゐたそれを、文学として耐へ得る水準にまで高めた作家として、ジュリアン・シモンズなどは高く評価してゐる。¹⁸⁾ 当初、彼が最も得意とした分野の一は、露国虚無党関係の暗黒小説で、『虚無党奇談』 (“Strange Tales of a Nihilist.” 1892) はじめ、『秘密機関』 (“A Secret Service.” 1896) ・『^{ツァー}皇帝のスパイ』 (“The Czar’s Spy.” 1906) など、これを扱つたものが数篇ある。我が国でも、『虚無党奇談』が松居松葉によつて訳出¹⁹⁾ (明治三十七年九月、警醒社刊) されて以来、お馴染みの作家であることは、更めて説く必要もあるまい。

彼の作品で華訳された最初の作品は、『月月小説』第一号から第十六号 (光緒三十二 [1906] 年九月一三十四年 [1908] 八月) まで、断続的に連載された

18) Julian Symons: “A Short History of the Spy Story”; (in “Bloody Murder.” pp. 221-236)

19) 旧稿「晚清に於ける虚無党小説」(『天理大学学报』第八十五輯) で、『虚無党奇談』の原作を、旧説に従つて「“The Czar’s Spy.” かと云ふ」と記したのは誤。訂正すべきである。

(華 訳 名) (原 作 者) (華 訳 者)
 三玻璃眼 英・葛威廉著 羅季芳訳

(Le Queux.: “*The Three Glass Eyes., A story of to-day.*” 1903)

である。阿英氏の書日には、「月月小説本。不完」とするが、訳者は第十七章の後に「結語」まで置いてゐるのであるから、一応の完訳と見てよい。

これと並んで、『月月小説』には、「威林筆記」と角書きして、楊心一訳「十年一夢」(第一号)・「国事探偵」(第二号)・「美人局」(第四号)・「緑林豪傑」(第七号)を掲げる。何れも短篇で軽いもの、『女たらしの告白』(“*Confessions of a Ladies' Man. Being the adventures of Cuthbert Croom of His Majesty's dipromatic service.*” 1905)からの選訳と、『東方雑誌』の広告にあつたのを記憶するが、検証を試みてゐる訣ではない。『新新小説』所載の陳冷血訳『虚無党奇話』(光緒三十二年, 1906)は、原作者の名を明示してゐないが、上記松居松葉訳からの重訳なるべく、単行上梓されたものとしては他に商務印書館訳印の『三名刺』(光緒三十三年, 1907 原作未詳)があるが、未見である。

楊心一は、又『月月小説』に、「海謨偵探案」として「剣術家被殺案」(三号)・「守銭虜再生記」(六号)・「墓中屍案」(八号)の三篇を訳載してゐる。何れも短篇で、原作者として「哈華德」の名を記すが、これはウォルター・ハウズの『奇怪な男たち』(Walter Hawes: “*The Mystery Men.*” 1905)の選訳である。ハウズについては、他に『雲上国無宿』(“*The Waifs in Cloud-land, being their surprising adventures in the kingdoms of Cumulus and Nimbus*” 1910)といふ作品があることを知るのみ、伝記も詳らかでない。

(5) 周作人訳『玉虫録』(ポウの『黄金蟲』)

当代中国に紹介された英・米探偵小説家は、勿論、以上の数に止まらなかつた。商務版『説部叢書』に収められた作品に限つてても、

| | | | | |
|---------|---------|---------|-------|--------------------|
| (華 訳 名) | (原 作 者) | (華 訳 者) | (発行所) | (刊 年) |
| 桑伯勒包探案 | [佚 名] | 商務印書館訳 | 商 務 | 光緒三十二年二月 (1906) |

| | | | | |
|-----|-------|--------|----|--------------------|
| 円室案 | 英・葛雷 | 商務印書館訳 | 商務 | 光緒三十三年八月 (1907) |
| 金絲髮 | 英・格離痕 | 同上 | 同上 | 同三十三年七月 (1907) |

などは、未だ原作追究の望みを果せないし、阿英氏の『書目』に見える

偵探新語 索公訳 光緒三十年(1904) 昌明公司刊 内八篇

- (一) 塔尖之自縊 夫概原著
- (二) 郵票毒 華士曼原著
- (三) 誘拐公司 雷比原著
- (四) 異形之腕 穆爾司原著
- (五) 復仇 佚名原著
- (六) 暗殺党 葛史克原著
- (七) 石炭窟中之偵探 愷陀斯敦原著
- (八) 試金室之秘密 歸蘭德原著

なども、訳本を披見し得ぬ儘に今日に至つてゐる。

雑誌掲載の作品に至つては、調査が一層不備である。『東方雜誌』第四卷五期(光緒三十三〔1907〕年五月)以降に屢時掲載されてゐる美国・加撒林克羅女史原著、甘作霖訳『筆記陶人案』・『筆記數縷髮』・『筆記黒幻像』・『筆記車中語』・『筆記拯三厄』などは、カサリン・グリーン(Anna Katharine Green. 1846-1935)の作品を、ダイジェストしたものかと思當をつけてゐるが、確認してゐないし、『小説林』第一号(光緒三十三〔1907〕年正月)以下に連載する美・威登著、張瑛訳の『黒蛇奇談』なども、未だ原作を明らかにし得ぬ有様である。

かうした有名無名の作家、玉石混淆の翻訳作品に混つて、

| | | | | |
|-------|-------|---------|-------|------------------|
| (華訳名) | (原作者) | (華訳者) | (発行所) | (刊年) |
| 玉虫縁 | 美安侖坡 | 碧羅訳・初我潤 | 小説林社 | 光緒三十一年 (1905) |

(Edgar Allan Poe: "The Gold-bug." 1843)

の名を見出すことは、吾々にとつて嬉しいことである。蓋し、訳者「碧羅」女史が、周作人の匿名であることは、周知のことであらうか。その間の事情については、『雨天的書』に収める次の一文に詳らかである。

今回既然成功、我便高興起来、又将美国亞倫坡(E. Allan Poe.)的小説

黄金虫訳出、改名山羊図、再寄給女子世界社の丁君。他答应由小説林出版、併且将書名換作玉蟲縁。至於訳者名字則為「碧羅女士！」。這大約都是一九零四年的事情。
(学校生活の一葉)

残念ながら、筆者は未だこの訳も見てゐない。従つて、軽々に論ずることは勿論許されないが、当時氏は未だ江南水師学堂に在学する学生で、日本留学の夢さへ果してゐない時分の仕事なのであるから、その成果は推して知るべきであらう。殊に、この時分の彼の翻訳は生硬な文語で為されて居り、林琴南の翻訳の様に文言でも一気呵成に書上げられたものではない。桐城派の文章といふと、とかく槍玉に挙げられ勝ちであるが、本来は温雅醇正な姿を標榜するものである。のみならず、其処には玄人と初心者との格差もあるであらう。余り高く評価することは、危険である。

とは言へ、これを光緒三十一年(1905)年——実際にはその前年——といふ年代に置いて、更めて考へて見ると、その意義は極めて大きいことに気付く。蓋し、光緒三十一年と言へば、上記『降妖記』や『馬丁休脱偵探案』の上梓された年で、翻訳文学流行の萌しが見え始めたとはいふものの、商務版『説部叢書』は未だ結集されてゐない。雑誌にしても、『月月小説』・『小説林』等は未だ創刊されるには至らず、『新小説』は殆んど休刊の状態にあり、文学専門誌としては僅かに『繡像小説』が、綜合雑誌としては『新民叢報』と創刊後間もない『東方雑誌』とがあつた程度の時代である。

しかも、ここに紹介されたのは、近代短篇小説の祖とされ探偵小説の手法を確立したボウであり、ボウの作品でも傑作の一に数へられる『黄金虫』である。これは、訳者の文人的素質——鑑賞眼の鋭さを示す何よりの証拠といつてよい。興味深いことには、この翻訳を契機として、周作人自らも大きく文学的に成長する。彼は、この後間もなく、ユーゴーの『クロード・ギュ』(Victor Hugo: “*Claude Gueux*.”) の影響を多分に受けた『孤児記』を創作し、留日(光緒三十二年)後は、息つく間もなく羅達哈葛徳・安度蘭俱の共著『紅星佚史』(光緒三十三年刊。原書は、H. R. Haggard & A. Lang: “*The World's Desire*.” ——すなはち、ホーマーの『イリアッド』に基く小説。民国九年三月上梓された林琴南・陳家麟合訳『金梭神女再生縁』と同一書)やハンガリーの

作家育珂摩爾の『匈奴奇士録』（光緒三十四年刊。原書は、Jokai Mor: “*Egg az Isten.*”）を訳出し、更には兄の魯迅に協力して、『域外小説集』（二冊。宣統元年刊）の出版に当る。『アリババと四十人の盗賊たち』あたりに停迷してゐた時代とは、大きな相違である。しかも、この兄弟が、近代中国文学史上に大きな足跡を遺したことから見ても、『玉蟲縁』の訳出は、重要な意味を有つて来る。それと共に、ドイルから遡つてポウに辿り着くといふ探偵小説創始期の路線は、次章以下に述べるガポリオーやデュ・ボアゴベイの紹介と相俟つて、一応の完成を見ることになる。（未完）

（なかむら ただゆき）

補 訂

前號掲載の蕪稿中、次の二項に補訂を加へる。

1)

| （頁・行） | （作品名） | （誤） | （正） |
|----------|----------|----------|------|
| P. 19・14 | 銀光馬案 | 六・八・九期 | 六期 |
| 〃・16 | （次を挿入する） | 墨斯格力夫禮典案 | 八・九期 |

従つて、P. 22の邊りには若干の補正が必要である。

2) P. 33～P. 34

光緒三十一（1905）年には、又次の譯が出た。

怪案 人鏡學社編譯處譯。人鏡學社發行。廣智書局印刷。光緒三十一年八月二十二日刊。

原作は、『降妖記』と同じく Doyle: “The Hound of the Baskervilles.”

（以上、樽本照雄君示教）。